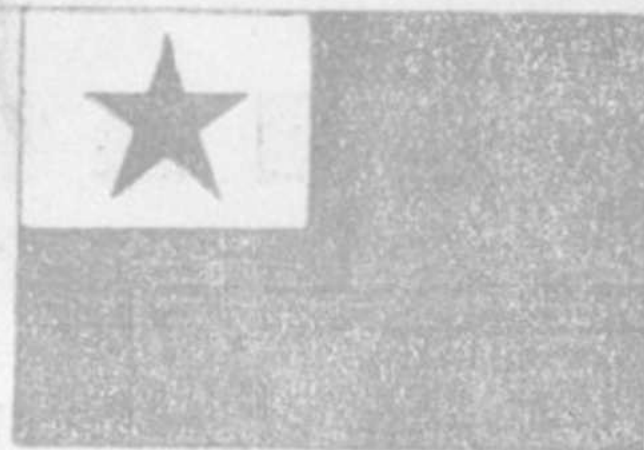


LA REVUO L'ORIENTA



エスペラント語研究雑誌「ラ・レヴオ・オリエンタ」
MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

JARO VIII
N-RO 12

第八年 第十二號

NOVEMBRO
1927

目次 (ENHAVO)

舞臺は出來上る.....	竹下文隆	317
TRA ESPERANTUJO		
海外消息.....		318
第十五回日本エスペラント大會記事.....		320
内地報道.....		325
ハイネの詩.....	森 露 夫	327
エスペラント初級講座.....		328
モンマルトルの夜.....	吉野櫻雄	330
關東震災歿死者名簿埋藏由來記.....	井上萬壽藏譯	332
ザメンホフの著書より.....	松本清彦	334
單語研究雜話.....	川崎直一	335
和文エス譯添削.....		336
フアラァーノ〔海外文藝紹介〕.....	曾根一郎	338
新刊紹介.....	堀 真 道	340
LITERATURO		
朝鮮民話〔エス原作〕.....	中垣虎兒郎	342
萬葉集より〔エス譯〕.....	三宅史平	344
綠の旅より.....	淺 田 一	345
リングヴァイ・レスポンドイの譯.....		347

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, TOKIO, Uŝigome, Ŝin'Ogaŭamaĉi III-14
東京市牛込區新小川町三ノ十四 財團法人 日本エスペラント學會
[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

帝國議會へ請願書提出の件

＝ つき各地同志諸兄の義侠に訴ふ ＝

先般福岡での第十五回日本エスペラント大會の決議により當日本エスペラント學會が委託を受けて来るべき第五十四帝國議會に對し先年同様の請願書及其他二三の新しい請願書を提出することになりました。つきましては甚だ申兼ねますが各地の同志諸君が奮つてこの舉に御賛同下さいまして署名をとりまことに御盡力あらんことを伏してお願ひ致します。來年度に提出すべき請願は大會の決議にしたがひその種類の多いことも必要條件の一でございますから最も採擇される可能性の多い次の二種の請願書を呈出致します。

〔請願書第一〕請願要旨：——國際補助語エスペラントヲ我カ國ノ小學校及中等學校ノ教科目ニ編入スルコトニ關シテ政府ハ速ニ適當ナル調査ニ着手セラレンコトヲ茲ニ謹ンテ請願ス。（請願理由はこゝに略す）

〔請願書第二〕請願要旨：——國際補助語エスペラントノ必要ニ鑑ミ文部當局ハ其監督下ニアル財團法人日本エスペラント學會ニ對シ毎年多少ノ補助金ヲ下附シ出來得ヘクンハ同法人ニ委嘱シ我カ國文化ノ紹介上裨益多大ナルヘキ文書ヲエスペラント譯セシメテ出版セラレンコトヲ茲ニ謹ンテ請願ス（請願理由は略す）

大會の決議では大會に補助金下附の請願を呈出する筈でしたが大會の主催者は毎年變るものであり且主催者が法人でも何でもないもの故か、る請願は到底採擇されないと思ひますのでこの趣旨をやゝ變更し當會に對して補助金下附を請願することと致しました。あしからず。もう少し澤山の種類の請願を出したいと思ひましたが期日が切迫してをりますので今年はこれだけにしました。來年はもつと澤山にしたいと思ひます。

注 意 事 項

扱以上の二種の請願書を貴衆兩院へ別々に提出しますから都合四通こしらへることになります。

- ◇用紙は美濃紙ですがこれは本會からおさづけすべき筈ですが貧弱な會計でございますから各人御負擔下さる様伏してお願ひ致します。
- ◇未成年者及外國人は請願の資格なし。婦人でも成年者はよし。
- ◇エスペランティスト以外の方々の署名もなるべく澤山たのんで下さい。
- ◇署名をとりまこめの上昭和二年十二月二十日迄に下記へ御送附の事。
- ◇送附先 東京市牛込區新小川町3の14
日本エスペラント學會請願係宛。
- ◇書式は右に示した通り墨で各自自署の上捺印して下さい。（印は認印でもよろしい）
- ◇用紙（美濃紙）は一枚を二つに折り各面に五名宛署名して下さい。署名は横にかいてはだめです。左記の例にならひ縦にかいて下さい。ローマ字もだめです。
- ◇つまり四通だしますから同じ様な署名したものを四通づゝ作つて送つて下さい。一通だけでは上の中一種で一院へしかゆきません。（必しも四通共全く同一でなくても差支へなし）。
- ◇住所が不明瞭だつたり生年月日を忘れてたりすると無効になります（一人が忘れても一枚十人分が無効）からよほど御注意下さい。
- ◇こんどはそれほど大げさにやりませんから費用の方の御寄附をいたゞかなくてもよいと思ひますが美濃紙だけは各自御寄附下さいませ。

財團法人日本エスペラント學會請願實行委員

署名の例

東京府東京市日本橋區紺屋町二番地	現住所
平民 雜貨商 勤八等	身分、職業、位階、勳等
川上五郎	姓 名
明治廿年二月十一日生	生 年 月 日

LA REVUE ORIENTA

★ JARO VIII, N-RO 12 ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ NOVEMBRO, 1927 ★

舞臺は出來上る

「國論」主筆 竹下文隆

◇エスペラントの必要に對して今更ら疑ひを挟む餘地はない。唯何が故に此の世界人類の通用語として必要不可欠なるエス語が、各國民をして争つて之に赴むかしめないかの一事は、お互が今後斯道の爲めに研究且つ努力せねばならない重要な使命であらう。汽車、汽船、ラヂオ等の普及の迅速なるに比して、文化の土臺となり人類幸福の大きな淵源である國際共通語のエスペラントのみが、何故に幾十年の年處を経ながら尙且つ遅々として世界人類の福祉に専らなることが出来ないのであらうか。

◇國旗と國語はその國民の誇りである。乍併、世界の悉くが比隣相通する今日、そして人類平等の大義が高唱せられる今日尙特に自國語を以て他に強ゆる國民ありませば、それは餘りに豪岸不遜の沒道漢である。世界の平和が眞に國際間の至幸であり、人類の至福である事に疑ひさへなくば、此平和の運轉臺である言語の上に、獨り一國語のみが專斷の威を擅にすることは許さるべきではない。

◇國際交渉の場裡に於て、用語の指定や限定はそれ自身一つの示威である。國と國との間に上下はない、貴賤はない。一國の文化や富や、兵艦や、そうしたものに依て他を排擠しようとするものは、名は國際交渉であつても、其實は威壓であり、抑制であり、無理強ゐである。這種交渉裡に何で平和があり、幸福があらう。平和は平等の上に築かれた自由の殿堂である。威壓や不公平の上に擬せられた平和は唯一つの蜃氣樓に過ぎない。斯かる空物が何で人類に幸ひし得られやう。

◇學問に國境はない。技術に國籍はない。而かも國語の偏執は學問の普及を阻碍し、技術の發達を阻止すること鮮少でない。若し國語の自尊に捉はれて敢て學問技術の普及發達を念せざるものありとすれば、それは明かな學問技術の賊である。言ひ換ふれば學問に忠なるもの、技術に専念なるものは、傳ふる

者、受くる者共に國語の桎梏から脱却して、自他共に不便の鐵柵から解放されなくてはならない。

◇世界は人類共存の舞臺である。共存共榮を念はずして、徒らに我執を張つたさて、それが今後の世界の一員として立ち得るものではない。世界の大勢と趨様は、一國の強大や、一民族の旺盛を以てして其我意を振舞ふにはもう餘りに進んでゐる。水に映つる己の影に向つて吠ゆる犬は先づ自らの肉を失ふ愚を知らなければならない。

◇既に人類の舞臺は世界的に編み立てられた。茲に登場する俳優が各自に臺詞を並べて何とせう。芝居には芝居の臺詞が要る。それがエスペラントではないか。

◇お互がそれぞれに意味を有つそれぞれの用語を使用して、どうしてデリカータな交渉が成らう。お互に温い握手をする時、お互の言葉が通じなくてどうして温情が湧かう。お互に砥勵し扶助する場合に、言葉が半可通で何の研鑽が成らう。臺詞の呼吸がピッタリ合つてこそ、芝居は見られるのである。それには世界共通のエスペラントより外に用ゆる言葉はないではないか。

◇國民が國語の自尊心に捉はれて、互にその私心妄念を去らない間は、世界共存の實はどうしても擧らない。エスペランチストの急務と苦心は茲にある。一日も早く自國語の過尊心から覺醒させること、幾多外國語の習得に要する徒勞と不經濟に眼覺ましむることは人類幸福の手解きである。そして眞の世界共存の實は先づ平等不偏の用語によつて、世界の各國民が、最も自由に、公平に、其の意思の發表や意見の吐露に遺憾なからしむるやう互に共同互存の襟度を持せしむる世界的運動こそは人類の幸福の爲めの實戰である。

◇然り、熱誠は私心や我執を脱服せしめ、數は無言の力を授ける。エスペランチストの急務は熱により數を加ふる事にある。

海外報道

ロシア革命十週年記念

11月7日 舉行される同祭には世界各方面の代表者1150餘名を國賓として請待し盛大に行はれるはずであるが、その請待客には各國の職業組合代表者、科學者、文學者(この中に秋田雨雀氏が含まれてゐる)等々々のほかに各國のエスペラント運動家が多數含まれてゐる由。(聯合モスクワ發、大阪朝日)

第七回 SAT 會議

Sennacieca Asocio Tutmonda の Kongreso は Danzig の大會とは別に8月12日よりフランスのリヨン市に於て開かれ、各國より約200の参加者があつた。たゞロシア人は入國禁止のため参加出来なかつた。日本の長谷川理衛氏はおされて幹部席に就いた。

オデッサ・ラヂオ放送局

日本内地では最近やつと JOCK でエスペラントの講習を一寸放送した位であるが、廣く世界を見ればニュースをエスペラントで放送してゐる所も少なくない。最近 ロシア・オデッサの放送局でも毎週水曜午後9時半(モスクワ時間)よりソビエツト國のニュースをエスペラントで放送することになつた。かくエスペラントを用ひてこそ眞の國際放送が出来ると云ふものである。波長 975m. もし聞えたら Sovet-Unio, Odessa, str. de R. Luksemburg n-ro 34, Radio-Studio へ通知して呉れさの事。なほ又スイス國ツューリヒの放送局も同じく毎日曜にエスペラントでニュースを放送することになつた。同放送局はこれまで數回 Idisto にはかれ Ido の講習を放送したことがある様であるが今後何の役にもならないイードなどは止した様である。

Festo de Libro

かつて日本へ來たこともあるハンガリーのエスペラント詩人 Julio Baghy (ユリオ・バギー)氏の主唱の下にエスペラントの發案者ザメンホフの誕生日12月15日を以てエスペランチストの「書物の祭」とすることが去るダンツィヒの大會で決議された。これはイタリーの Festa del libro の宣傳が大成功をおさめてゐるのを眞似て出来たものであるが、それはこの日を期し、すべてのエスペランチストは少なくとも一冊のエスペラントの本を買ふ様 morale に devigi されてゐるのである。かくすれば一つにはザメンホフをしのび、一つにはエスペラントの良書出版の助けをすることに

なり甚だ好結果をもたらすことと思はれる故 naïva だなど、云はずに各自實行されんことを切望する。

ザール河地域のエスペラント

同地方には最近目覺ましくエスペラントが普及されて來たが、遂に同地方の當局より、告示第十一の 990 號にて中等及高等學校に於てエスペラントを隨意科目として課することを許可し、中級にては毎週二時間授業する様にすゝめてゐる。なほその上、エスペラントの教師を養成するため、その講習が開かれる由である。

エスペラントよりの翻譯

最近イタリーに於てオランダの Luisius 氏の Karaktero が譯され出版された。これまでもエスペラントより譯されたものが單行本として出版された事は數多あるが、かくして益々エスペラントの應用範圍が廣まつて行く。

カタルーナ・アントロギーオ

カタルーナ(イスパニヤ國の一地方)の文學の粹を集めてエス譯し立派な大冊として出版された同書は、もはや一版も賣りつくし再版にかゝつてゐるが、同書こそは眞にエスペラントの有用さを世に知らすものと云ふべく、これまでカタルーナ語と云ふ偏卑な言葉で書かれてあつたため、あたら名文、名作も一般世界に認めらるゝに至らず埋れ木としてくちてしまはんとしてゐたのを、全世界に我がエスペラントによつて廣く紹介したものであるかゝる仕事は唯エスペラントによつてのみなさるべき事であるが、これを同カタルーナの諸新聞もやうやく認めるに到り、同地の作家とともに同書編輯者に對し多大の感謝の意を表してゐるさうである。

ポーランド案内記

最近日本の鐵道省がエス文日本案内記を出版して全世界の注目をひいたことは御承知の通りであるが、それに前後してポーランドの Esperanto-delegitaro は Pollando kaj Gdansk と云ふ日本にあまりおそらない様な案内記を出した。多大の美しい寫眞入りで良質紙に、氣持の好い印刷がしてある。が國際的に用ひられてゐる Danzig なる字を用ひずにそれをこそさらポーランド語で Gdansk と書いてゐるのは例の「ダンツィヒ自由市はポーランドのものだ」と考へてゐるポーランド人の惡癖(?)があらはれてゐるのであらうか。

荒野に萌えた緑の芽

南に波斯、アフガニスタンを控え西はカスピ海の波に洗れる中央亞細亞の一角の平原地方にもエスペラントの蕾は次第にふくらみかけて居る。ツラン平原とよばれる同地方の住民は農牧の民として浮草の如き生活を送つて居る。1925年には已に露西亞の一同志が同地に最初の種子を蒔いたが幾許くもなくそれは花と咲かずに終つたのである。しかし蒔いた種子は無駄ではなかつた、翌1926年には同地方の大都會アスカバード (Askabad) に於てはバハイ教徒の間に熱心な講習會が開かれ、同地の官立諸學校では外國語として英語獨語が教授されるのに、バハイ教徒の立てた學校に於てはエス語が最上二級の必修課目とされるに至り、現在に於ては一般成人のエス語講習の準備をして居ると云ふ。

世界文學唯一の言語

羅馬尼に於ては知らぬ人のない程著名な文學家にして人道主義者のオイゲン・レルギス (Eugen Relgis) 氏は或は筆に或は口に機會ある毎に吾々の運動を援助して居る熱心な一同志である。彼の有名な諸著作はやがて全部エス譯される事になつて居るが、先づ彼の主著 “Humanitaristaj Principoj” のエス譯は間もなく出版される運びになつた。彼は本年ブラショフ市に開催されたルーマニヤのエス大會に出席して次の如き挨拶をした。彼は先づ自著のエス譯の出版されんとする事を感謝し次いでエス語が已に立派な一言語である所以は單にシェークスピア、ゲーテ、ユーゴー等の諸著すらがエス譯され得たと云ふ點にあるのみでなく、なほ進んで詩歌に小説に又哲學科學に人間の思想感情を直接にエス語によつて表現されて居る事實によつて已に證明されて居る點にある事を強調し、進んでザメンホフの偉業は彼が言語の存在し得るには先づその言語が生命ある有機體であらねばならぬ所以を了解して居た點にある事に言及して、やがて直接にエス語によつて書かれた文藝作品のみが先づ世界文學の中に第一の地位を得、英獨佛等の各國語で書かれた諸作品はエス譯される事を以て無上の光榮とするのが間もなく来るであらうと結んで居る。吾々が各自國語の諸作品をエス譯するのは一にはそれによつて自國の文化を紹介するにもあるが、又かくする事は吾々の筆をならしやがては現れるべき世界文學界第一等の地位をエス語によつて表現しやうとする一つの練習でもあるのだ

レルギスの言はまことに味はふべきものと云ふべきであらう。

平和教育とエスペラント

本年4月16日より20日にかけてチュツコロヴァキヤの首府ブラハに開催されたジュネーヴの國際教育事務局發起の國際教育會議の次第は已に本誌七月號196頁に詳報した通りである。學校教育によつて平和思想を涵養しやうとの趣旨にある以上は學校に於てエス語を必修課目として教授することもプログラムの一部にならなければならない。本年八月北米カナダのトロント (Toronto) に開催された世界教育協會聯盟 (Monda Federacio de Edukaj Societoj) の大會に於て北米エスペラント協會の會長 Henry Hetzel は上記の趣旨を強調し、同大會は學校教育にエス語採用の重要さを認むる旨の決議をするに至つた。合衆國及びカナダの諸新聞雜誌は賛意を表する記事を掲載した。

波蘭郵便従業員大會

波蘭の郵便従業員協會は非常にエスペラントに好意を持ち、世界的郵便従業員のエスペランチスト團體たる Ilepto に入會したりして、Ilept でも波蘭のこの協會の會長シュチュレク (Szczurek) の發起により、同會の機關誌である “Interligilo” の特別號を發行して波蘭に於ける郵便従業員の生活を掲載した程である。本年の9月28日にはワルソーで第九回全波蘭郵便従業員大會が開催され約一萬六千人の従業員を代表する約百人の代表者が集り同國の郵便大臣メジンスキー氏も出席した。同大會には各外國同志からのエス文の祝電が盛んに送られ、それが朗讀される毎に多大の喝采を博した、郵便大臣もエス語に對する好意と賛同を表する事を惜まなかつた。

宣傳旅行の効果

現在ブルガリヤの各地を旅行して至る所に歡迎されて居る英人 Yelland 夫妻の宣傳の力はまことに偉大である、即ち彼等が Lesićevo 町を訪問するや同町民間のエスペラント熱は甚だ昂まり早速同地圖書館に講習會開かれ、Panagurište を訪ふや直ちに同地に新しくエス會が組織され同地一流の新聞はその會見記で賑ひ中學校長は生徒の爲に講演を依頼し、Zatica 町を訪ふて同地唯一の同志の宅に招かれ、ばその夫人や夫人の友人達は早速エス語を學びたいと云ひ出した。彼等の宣傳が上手なのか或は同地方の流行なのか知らないが長續きすることを望みたい。

第十五回日本エスぺラント大會參加者小照

(一八) 失名氏

[illegible]

第十五回日本エスペラント大會

〔10月15—17日福岡市にて 18—19日長崎市にて〕

〔來年度大會は大阪にて開催〕

十月中旬西日本の文化の中心地たる福岡市に我第十五回エスペラント大會が開催された。全國から集るもの二百數十名。

九州は最近目覺ましくエス運動の發展した地である。福岡を中心として北九州の諸都市に同志雲の如く西は長崎。南は熊本鹿兒島東は別府宮崎等に及び我國エス運動の中心は九州に移つたかの觀がある程すばらしいものである。

第一日(十月十五日)

前日からポツポツ大會参加者が福岡さして乗込んできた。十五日は朗らかな小春日和であつた。この日午前十一時半急行列車で東から多數の同志が來福した。芬蘭公使ラムステッド博士も同じ列車で來られた。福岡の同志十數名。白地に青十字の芬蘭國旗と緑星旗を先頭に之等同志を迎へた。出迎の人々の中には江口、城戸崎の闘士を始め大島博士、藤澤教授、伊藤助教授の三先生も見えた。此日九州帝大總長は Ramstedt 博士のために歓迎の晝餐會を催し大學の評議員たる諸教授並びに上記三先生も列席し盛大な festeno が開かれた。他の kongresanoj は一同打連れて合宿たる海容館に到り少憩の後晝食をした。め横山(福岡)、岩尾(別府)氏等の案内にて市内の目抜の場所たる川端町邊から中洲町を散策して中洲ブラ氣分を味ひ電車で東公園へゆき日蓮上人の巨像に一驚を喫し帝大の構内を散策し病理教室で休ませてもらつて夕頃合宿へ歸着した所江口氏より十五銀行地下室で有志がラムステッド博士歓迎會を催すから希望の方が出席してくれとの電話があつたので早速十人程隊伍を組んで會場へ赴いた。藤澤教授の熱烈な歓迎の辭に初まつて夫々自己紹介等あり。途中五高教授たるメーヤー (Meyer) 氏が宴會に出席されたので早速其晩の宣傳講演會に出席出來なくなつた Venables 氏の代りに saluto をやつてもらふことにしたので宴會の途中で大急ぎで演說會場へ自動車をごばせた。

19時半普及講演會(市紀念館にて)にうつりまづ司會者大島廣博士の開會の辭について熊谷鐵太郎氏(盲人牧師)が「我國の將來と國際語運動」なる演題の下にエス語の必要を力説

し熱辯舌端火をはくの慨があつた。ついで國際聯盟東京支局の栗飯原晋氏がバハイ教や國際聯盟とエス語關係の事について雄辯をふるはれた。次にメーヤー教授がエス語にて英國人が何故エス語の必要を云々するかといふ事について少しく述べられそれを resumi して藤澤教授が日本語に通譯して説明した次に當日の呼物たるラムステッド博士の芬蘭國情紹介講演(エス語)があつた。通譯は永松之幹君であつた。始め新興國フィンランド國の興亡について滔々數千言を費しついで幻燈を使用してつぶさに同國の國情を説明紹介しそのさく所徹を穿ち細なきはめ前後二時間を費してやつと終つた。江口廉氏の閉會の辭を以て無事講演會は終つた。時正に 22 時。演說中一しきり時雨れた空もやゝ霽れて星が一つ二つまたゝいてゐた。後九州其他各地地方會代表がカフェーブラジルに集合して翌日の協議會の下打合をした。23時半散會ポツポツ雨がふつてきた。

第二日(十月十六日)

カラリと晴れ渡つた好天氣であつたが時々少時雨があつた。當日は福岡城趾内の偕行社をかりうけ發會式及協議會、分科會、雄辯會が開かれた。濠端で電車を下りると Bonvenon とかいいた大きなアーチが我々を迎へてゐる。城内に入れば到る所緑星旗が張りめぐらされてゐて氣も心もうきたつ許りである。三々五々 kongresanoj がはせ參じた。大會發會式は愈々定刻10時に始められ九州エスペランティスト聯盟幹事たる江口氏が大會準備委員を代表して挨拶をのべ Espero の合唱(星子女史のオルガンの akompano にて)を終つて會長として伊藤助教授を協議會の議長として藤澤教授を推薦した。ついで伊藤會長は流暢なエス語を以て大會をこの地に開催するのよろこびをのべエス運動の將來を祝福するとむすんだ。通譯は城戸崎益敏君で見事にやつてのけた。次いで來賓の挨拶にうつり九大總長大工原銀太郎博士がエスペラントの驚嘆すべき發展振を嘆稱し日本エス學會の會員の地方別によつて地方文化の程度をトする一端とすべしと論ぜられ福岡縣が三府について學會會員の數の最も多き事をさかれた。それから最後に

自分も六十の手習で最も近き將來にエスペラントを學ぶ心算であるとのべられた。ついでラムステッド公使のエス語の *saluto* があつた。國際平和の礎こそエス語によつてなされるものと述べられた。次いで大本教の出口王仁三郎氏登壇「自分は蒙古入した時捕縛されて逆さにつりさげられたが貧弱なエス語と支那語との力によつてやうやく許してもらつた」のべられた。終りに國際聯盟支局の栗飯原氏の挨拶あり。つぎに女子文化學院長齊木氏が和歌一首を以て祝辭にかへられ之を藤澤氏が速座にエス譯してよみあげて大喝采を博した。ついで各地よりの祝電祝辭の朗讀あり。(中西義雄氏朗讀) ついで各會代表の挨拶があつた各會及代表者次の如し

日本エスペラント學會	岡本好次氏
京都エスペラント會	矢戸圭一氏
大本エスペラント會	伊藤榮藏氏
エスペラント普及會	山田二郎氏
神戸エスペラント會	宇都宮正氏
名古屋エスペラント會	白木欽松氏
東京エスペラント俱樂部	山田武一氏
濟世軍エスペラント部	中西義雄氏
リベラエスペラントクラブ	伊藤利雄氏
若松エスペラント會	原田隆次氏
萬國エス醫學協會	浦良治氏
エスクラピーダグループ	田邊治夫氏
福岡エスペラント俱樂部	高橋運氏
別府エスペラント會	岩尾壽樂氏
五高エスペラント會	吉村玄三氏
人吉エスペラント會	勝枝利純氏
戸畑エスペラント會	林茂氏
門司エスペラント會	大場格氏
小倉エスペラント會	中野勝政氏

以上の挨拶終つて Tagigo の合唱にて發會式を閉じ一同庭にて紀念撮影をなし中食をした。めた。

13時大會協議會に移り藤澤親雄教授が議長にて議事は全部エス語にて迅速敏活に進行した。何分前夜大體の下相談ができてゐたので案外手つさりばやく進行したのである。協議事項はさつと二問題で第一は來年度大會開催地決定の件である。九州聯盟の方で各地方會問ひ合せた所十分満足な結果がえられなかつたのである。それで前夜の下相談の結果に基き來年度大會はなるべく大阪市に於て *inviti* していただきたいとの決議を満場可決した。そしてその決議にもとづいて八木、川崎の兩氏に委任して大阪の同志が大同團結して來年

度大會を *inviti* される様態通することを申し合はせた。川崎氏は大阪での例會でこの問題については二回ともその時期にあらずとして否決されたことをのべ右の次第故十分の責任をもつて必ず引受けてもらふ様に努力するといふ事は保證できないから豫め了承を乞ふ旨をのべられた。第二は本年も前年の例にならつて議會請願を提出すべしとの問題にてこれは満場異議なく數氏の賛成演説あり岡本氏より請願は一通出すよりもなるべく種類を多くすべき事をのべられたので議場にはかりこれも異議なく可決され植田氏の提案により右請願の實行は日本エス學會に委嘱することとして可決確定。次に大島博士の提議にかゝる昨一年間に死亡した有能なるエスペランティストの遺族に對し大會の名に於て弔意を表することを可決した。かくて協議會も無事終了。引續いて分科會にうつり七分科會が成立し夫々各科に分れて討論研究した。一時間程の後之を終へて本會議に移り各分科會の報告に移り醫科分科會は八木氏が之を報告した。決議事項はつまり JEMA の發展と併せて TEKA を大いに支持することの決議をなした由。盲人分科會は熊谷氏の報告あり。之といふ決議をせずまづ岡山大會でできた日本盲人エス協會といふものがまだ生れてゐないがその第一歩をきづくことを申合せた。宗教分科會は伊藤氏之を報告し宗教方面の事に關し年に一二回 *Revuo Orienta* 誌上を拜借して何かその方面の記事をだしてもらふ事を申し合せた。文藝分科會は大神氏之を報告した。別に特種の決議なく有意義なる *originala verko* の出現をのぞむ事を希望した。商工業分科會は富松氏之を報告し商工業方面にエス語の活用されんことのため努力する決議をしたと報告。SAT. 分科會は畑氏が之を報告した。Sennacieca *Revuo* 及 Sennaciulo を支持すること及それら雑誌の *Esperanta stilo* のよくないのを *plibonigi* することを懇通する意味の決議をした由。婦人分科會は渡邊嬢の報告あり。別に決議をせず互に親睦の意味で懇談をした。

それより直ちに雄辯會 (*oratora kunveno*) にうつり藤澤教授の司會の下に次の諸氏が熱辯をふるつた。

世界	龜岡 伊藤榮藏氏
淋しき夏	戸畑 林道治氏
使徒ポーロ	神戸 宇都宮正氏
Esp. と盲人	宇部 熊谷鐵太郎氏
鍼灸の話	京都 八木日出雄氏

大本は何を目的としてゐるか

	龜岡	山田二郎氏
今の福岡	福岡	村上知行氏
怪物とその阿諛者	福岡	畑正世氏
國際文化と科學	福岡	永松之幹氏
戰の準備	若松	原田隆次氏

日本の進むべき道 福岡 藤澤親雄氏

熱烈火の如き雄辯あり辛辣骨をさす能辯あり。いづれをさらぬ一騎當千の oratoroj である。薄暮あたりを、む頃無事雄辯會もさちて一同打連れて晚餐懇親會場たる柳町の新三浦屋へゆく。この邊は昔の遊廓地で近松の博多小女郎浪枕で有名な所はこゝである。今は別の所へ移轉して當時の面影は全然ない。會するもの五六十名。博多の名物水たきに舌鼓を打ちくつろいで愉快的時を過した。ラムステッド公使やメーヤー教授も出席してうまいまいと大よろこび、内務省社會局の吉阪俊藏氏も出席され役人もエスベラントをやらなければだめだと大熱辯をふるはれ、八木氏や中野氏等の話もあり、途中福岡の同志の一人たる藤瀬天洋氏。(鐵道につとめてられるが手品師としても相當の腕前の人)が餘興にさて様々の jonglado をしてくれたので拍手喝采なりもやまず三味線で鳥や動物の鳴聲をまねたり仲々堂にいつたものであつた。23時散會。

第三日(十月十七日)

今日は奈多濱への遠足日であるが生憎の早朝から雨模様で一同悲觀してゐたが幸に十時頃になつてはれてきたので 10 時 50 分新博多驛に集合の上博多灣鐵道にて貸切車にて出發白妙青松の博多灣に沿うて北上すること數十分奈多驛へ着し直に荷物を驛前の奈多屋に預けて松林をぬけて芋畑に出で芋堀遊をした。伊藤先生は連日パテベビー(携帯用活動寫眞撮影機)を携帯して隨時隨所で撮影せられた。本年五歳の江口えみ子嬢がかはいらしい洋装で大きな芋をほつてゐる様子はまたなくかはい、もので早速伊藤先生のカメラに収まつた。

それからもこの奈多屋に引かへして二階で一同晝食をした、めた。ラムステッド博士のフィンランド語での演説があつた。それから濱に出たが呼物の鯛網は天候不良のためだめになつたので一寸した地網引をした。當日早朝鯛網引の船を沖合にだしてもらつたが天候不良で駄目だつたので途中引返して來たこの事です。主催側の腕によりなかけた催も遺憾ながら天候のため駄目になつたのは御氣の毒

だつた。16 時北九州の同志や、長崎の Postkongreso 参加者は奈多を出發した。福岡の同志や Postkongreso に参加せないものは猶奈多の外海の方へいつて雄大な景色を賞し夕頃解散した。

Postkongreso

16 時奈多をで、香椎で省線にのりかへた長崎行の postkongresanoj は十數名であつた。汽車中は四方の景色を賞玩してゐたが直きに暮れてしまつた。大會のうれしい思出をのせて南行した。途中 T.K. 兩君が二等車のラ博士を訪れて切符拜見の車掌君につかまつておまけに罰金大枚 6 圓 50 錢を申渡されて大弱りやつと植田教授の取計ひで金 20 錢也にまけてもらつて大喜びの喜劇一幕があつた。汽車は無事 23 時長崎驛着。多數同志の出迎へをうけ合宿(千代の家族館)へむかつた。

第四日(十月十八日)

10 時頃から一同集合の上長崎市の名所舊蹟を見物する事にした。長崎は古來支那との交通も多くしかも織豊時代天主教の渡來の中心地であり基督教禁壓後の天主教徒の叛亂等あり後鎖國時代蘭船渡來の唯一の港として西歐文化輸入の唯一の關門としてその史蹟のみるべきものが甚だ多いが時間がなかつたので最も著名なものを二、三見る事にした。

合宿を出て鐵橋(ガベ)を渡りそれより電車で長崎驛前へゆき基督教徒虐殺の跡たる西坂の地を訪れ引返して本蓮寺で切支丹井、寢返りの間などみた。次に支那寺たる福濟寺を訪れ立山御役所跡の外壁を一瞥した。

縣立長崎圖書館を訪れて史料室へ案内され禁教時代の踏繪だとか天草版平家物語だとか和羅辭典だとか朱印狀とかその他様々のものをみた。そこを辭して諏防公園へゆきケンベル・ツンベルグ紀念碑をみたり長崎の町を展望した。諏訪神社へ詣でた。こゝには英文のおみくじがある。A 君は good luck (幸運)をひきあて、marriage: good match (結婚: 良縁)で大よろこび B 君 Bad luck をひきあて、大シヨゲ。それより出島の蘭館跡をたづねてから大浦の天主堂へゆく。これは長崎立山で殉教した 22 人の人々を紀念するためにたてられたものでいろいろ説明して貰つた。歸るとき丁度伊藤城戸崎濱中の三氏と別のコースで自動車で市内見物をしてゐたラムステッド博士がやつてきた。

それから長崎の同志の歡迎晚餐會に出席した。會場は大徳園。某氏所有の遊園地で一般



Postkongreso 晩餐會の後

〔寫眞説明〕

左より前列 城嬢、ラ博士、黒宮(愛知)、植田(長崎)、川崎(大阪)、飯河(大阪)。中列 大井學(東京)、久米(長崎)、關口(吳)、土肥(熊本)、白木(名古屋)、田邊(東京)、城戸崎(福岡)。後列 富松(長崎)、谷口(長崎)、岡本(東京)、濱中(北海道)、伊藤(福岡)、中野(京都)、山田(東京)、高原(長崎)、田村(島根)、帆足(長崎)

に公開してあるさうである。こゝへ支那料理をさりよせて三つの圓卓をかこんで支那料理に舌鼓をうつ水博士高原憲氏の美辭麗句をつられた雄辯(エス語)に一同のどきもをぬく。長崎は汽車でくるより港の方からながめられた方がより美しい。外人がよるこんでこの地に永住したのは nigrokulaj knabinoj が澤山いたからだらう。若い連中をヤンヤとよるこぼせた。ついで自己紹介があつたが萬緑叢中紅一點の城々子嬢が「私は今年初めて大會に出席しまして我々は井戸の中の蛙であつてはならないよろしく大海(=大會)をしねばならないさ感じました」と云はれて駄洒落連發の男子連を一蹴したには全くおそれいつた。田村氏の本場の安來節や城戸崎氏の博多方言のにわかで福岡のエス會の諸名士を槍玉にあげたキョーさには一同賛嘆した。寫眞撮影の後ラムステッド氏はいそいで講演會場へむかつた。

講演は午後七時半から市役所の樓上で幻燈使用の上ラムステッド博士の芬蘭國情紹介講演であつた。開會の挨拶及通譯は植田高三教授でラ博士のエス語を滔々懸河の辯を以て通譯して聴衆の大満足をかちえた。最後に高原氏の閉會の挨拶をのべエス講習會が近くひらかれるからぜひ出席下さいとつけ加へた。聴衆三、四百名の盛況であつた。此晚23時に歸途につかれた kongresanoj も少しはあつた。

第五日(十月十九日)

今日は雲仙嶽へ遠足の日である。天氣は申分のない快晴。朝七時半 Ramstedt 博士は富松氏等と縣廳からさしまはしの自動車に其他

の同志は他の自動車に。尙一臺谷口税關港務部長の提供された自動車と都合三臺の自動車がつれだつて冷たい朝風に綠星の小旗ひるがへさせながら千々岩灣に沿ふて走る。朝日にてりはえてゐる山々が遙かに青い海の彼方にそびえてゐる景色はなんともいはいれない眺めであつた雲仙公園へ到着したのが10時過こゝで自動車をなり事務所で少憩の後ゴルフ場まで自動車にてゆきそこでいよいよ普賢岳へ登ることとしてその用意をした。ゴルフ場は山の裾野にあつて一面の芝生である。こゝをすぎてなだらかな傾斜に添ていよいよ登り初めた。何分大會で連日の疲勞の上昨晩は晚い上に早起きをしたので一同多少の難色あり。最も弱つたのは中野忠一郎老(京都)と岡本氏(東京)。中腹仁田で中食をしたゝめた。こゝで谷口(税關港務部長)、伊藤(福岡)、城戸崎(同)濱中、帆足の五人は數回登山した事がある故こゝから下山して湯に入つて休み、あとの連中はとにかく頂上まで登る事にした。頂上までいつたのはRamstedt 博士、飯河(大阪)關口(吳)、黒宮(愛知)、富松、中野、岡本の七氏他に縣廳の御役人と事務所の人々二三人であつた。歸りもかなり難行であつたが17時前下山した。そこで早く下山したものは温泉地獄めぐりをしていよいよ17時30分自動車に再び搭乗小濱へでたが途中道が悪いこの事でもこきた道を疾驅した。あたりはまつくらでたゞ星がまたゝいてゐるばかり冷たい夕風が身にしみる。20時長崎の高原氏邸へ歸着。この晚高原氏の好意にて同氏邸にて一同長崎の名物卓袱料理を御馳走になつた。

内 地 報 道

劃時代的快舉

最近 東大教授緒方知三郎博士はその近著「病理學總論」(400頁 三田村博士と共著 定價7圓半)といふ膨大な病理學の大著述を發表されたが其各頁の下部にその頁中にでゝくる學術語の外國名をあげてあるがその筆頭にエスペラント語をゴザツク體で入れ次にラテン語ドイツ語英語等をいれてあるといふ事は今後の我が醫學界でのエス語の地位を認められてきたことであつて我々はこの博士の英斷に敬服する次第である。エス語の語彙をこういった立派な著述の中へ入れられたことは嘗てない事である。しかも他の外國語を排して眞先においてあるといふ事は我々にまつて何と心よい事ではないか。いづれこの總論について各論が執筆されるだろうがその各論でも同様の態度をとられんことを祈つてやまない。醫學界でも Esp-isto の最も多いのは病理學界であるからこの書物がでた事によつて我病理學界のエス語熱はますますたかまるであらう。

東京

東京高等學校では10月10日12.5時で第一回初等講習の準備會を開いた。出席者50名。同校エス會會長宮田教官がエス語の出現につき説明され次に宮城君が文法の輪廓を説明した。之について講習會を開く豫定である。申込者80名ある由。

仙臺

第二高等學校のエス會は一時奮はなかつたが最近土井(晚翠氏令息)君がその中心になつて大いに活躍を初められた。10月16日にエスペラント参考品展覽會(材料學會出品其他)を催し更に18日普及講演會を催し更に毎週一回講習會を始めた。講師は菊澤季生氏。90名の聴講者ありと。同校會長は多田教授副會長伊坂教授。顧問として吉井教授ジョーンズ講師をいたゞく吉井氏以外の三氏はすべて英語科の教授であるのは注目に値する。大槻、高橋、石井、大橋、安積、土井の諸君が發起人です。

京都

第三高等學校エス會では去四月學年始に宣傳を始め講習を開始したが受講者 50-60 名の盛況で講師は石井一二三君。9月中旬から再び初等講習。10名聴講。講師桑原利秀君。同時に中等講習として輪讀會も開いてゐます。

★9月15日には京都エスペランティストの集合が京大樂友會館であつた。なかなか面白かつた。

長野縣

上田市の講習について丸子町で講習開始。講師竹内藤吉君。

長崎

10月21日より7日間大會 postkongreso のあそなうけて初等講習開催。高原氏邸に於いて。★先般海事部の塚本濱地兩氏の盡力と三菱造船の西島課長の援助により造船所に實習中の東京神戸兩高等商船學校の學生9名に初等講習をなす。講師富松氏(寫眞は346頁にあり)。★10月塚本濱地兩氏は門司へ轉任された。★10月29日滿蒙旅行の同志濱部氏のため勸迎晚餐會を開く由。

中津

大分縣中津町にて10月29日19時より同地エス會主催エスペラント學術講演會を開催。入場者一千名。町長も出席された。プログラモは 1. 開會の辭 石丸鎮雄氏 2. エス語の輪廓 江口廉氏 3. 我國における外國語問題 大島廣博士 4. エスペラント文學 伊藤助教授(通譯 城戸崎益敏君)

八幡

八幡エス會主催で同市における第2回エス展覽會を同市 國見町八幡高等技藝女學校にて開催。期間 10月1日-2日 來訪者 200 名。★同3-14日同所に於て第8回講習會を白石氏指導の下に開催。15名聴講。★北九州月例會を八幡エス會主催にて同校に於て開催。門司小倉、若松、戸畑各會より多數同志參會。決議數件。10時散會。★10月19日第一回研究會開催。會場中本町3丁目エス會事務所にて毎週水土2回。舊會員のためには木曜一回。

大阪

大阪醫科大學では學會大阪支部主任米田氏の指導で講習會などをやつてゐたが今回愈々大阪醫科大學エスペラント俱樂部といふ會が創立された。昨年度年鑑所載の醫大綠星會は豫科のみの會であつたが今回できたのは豫科と本科を合併したものである毎週月曜日に研究會を開く。(農野氏報)

東京

慶應エス會では10月26日15時より塾内佛教青年會ルーマにて久し振りに懇親會を開催、會する者廿名、栗飯原氏前日來朝のハンガリー同志 Franz Baladz 氏を伴ひて來訪、懇親會は變じて、遠來の客を迎ふる歡迎會と化す。平和、菜食に關する問題を討論して17時閉會。★★栗飯原、松本兩氏

は同會閉會後同氏を伴ひて學會例會に出席、22時近く迄愉快に談笑。尙、T.E.K. による同氏歡迎會は來月十日に行ふ由。

★共立英語會(芝區芝公園第六號地三番)では10月22日より11月26日迄毎週土曜日自18時半至21時半3時間宛エス語初歩短期講習會を開いてゐる。講師は飯田忠純氏。

名古屋

JOCK に於けるエス語講習放送のため來名した石黒修氏のため9月24日夜公園前清榮軒に於て歡迎會を9月30日夜睦ビル前アサヒ食堂に送別を兼ねた親睦會を開催しエス談に花を咲かせ又、普及方法につき協議した。★毎日曜夜名古屋エスペラント協會に於て輪讀會が開かれて居る。多數同志の參列を希望す。★尙、同協會新住所は名古屋市中區老松町十の五〔大學病院前、交響堂ハーモニカ専門店〕(山田氏報)

京都

10月16日夕、エス普及會京都支部では大會に参加し得ざりし同志の爲、河原町四條上ル伊賀氏方にて記念の會合を催す。參加者18名エス語の演説等があつて盛會裡に閉會。

小倉市

10月23日19時より、北九州エスペランティストの大會報告及批判茶話會を京町コドモハウスにて開催、出席者は北九州五市(門司、小倉、八幡、戸畑、若松)より十九名、夫々大會に關する感想を述べ、結局今度の大會は Konatigo, unuigo, amikigo が不十分ではなかつたかと云ふ事を語りあつた。更に九州聯盟本部の批判があり、22時過散會。

函館

函館エス會では前會長虎渡乙松氏他界後久しく會長を缺いてゐたが此度函館商船學校教官海軍中佐小森正銳氏を會長に推戴した。氏は秀た同志であり殊に函館エス會に對しては献身的好意を寄せられてゐる。會員40名、毎金曜日に會話練習會を開催。同會所在地函館市千代ヶ岱17、小森氏方。(前月號寫眞參照)

◆内地報道用寫眞頁の都合で346頁にあり。

新聞雜誌とエス語

★東京日日(9月30日)——松永氏のエス語獨唱會(記事)

★經濟(10月1日)——エス語初等講座 石黒氏

★労働運動(同)——Pri la balotelekto de prefektejaj delegitoj.

★東京朝日(10月1日)——アメリカ行人形の

名をミス何々させずフラウリーノと改めよ——(投書欄)

★國民(10月4日)——エスペラントを話す日本橋堀留署長さん木崎氏——(記事)

新愛知(10月4日-6日)——最近のエス語運動——山田弘氏

★國民(10月6日)——エス語講座の設置 J. O. A. K. にて——記事

★東京朝日(10月5-7)——エスペラントの二週間=世界大會參列記——土岐善磨氏(記事)

★ジャパン・タイムス(10月19日)——英語教育大會に試みたパーマー氏はその演説中エス語につき論ず。

★奉天毎日(10月14, 15, 16)——國際補助語へ——奉天エス會員寄(記事)

★神戸新聞(10月15日) 福岡日日(10月16日) ロシアで發行のザ博士肖像切手——(記事)

★福岡日日(10月17日)——第十五回エス大會——(社説)

★同(10月18日)——英語廢止を主張す(社説)

お 願 ひ !!

新聞雜誌上で Esp. に關する記事乃至論説の現はれたのを知る位嬉しいことはない。之に關し同志諸君よりお送り下さるものは Esp. movado の好資料として保存するに努めてゐますが今後は尙一層徹底的な蒐集を行ひたいと思ひます。それには諸君の御援助に俟たねばなりませんから爾後かゝる新聞雜誌は出来るだけ御送附下さらんことをお願いいたします。(學會内 徳田六郎宛へ)

來年度大會は大阪で開催に確定

——小坂氏より——

München, 9/X/1927

Karaj Samideanoj, —Hieraŭ matene mi alvenis ĉi tien en München kaj en la vespero ĉeestis la kunvenon pro la 40-jara datreveno de Esp., donitan de la loka laborista grupo. Hodiaŭ mi ankaŭ alestis la ekzamenojn de Esperanto. Ambaŭfoje kompreneble oni petis min fari paroladojn. Hodiaŭ nokte mi veturos al Leipzig.

Tute Via K. Ossaka.

議會請願をします。大いに御盡力下さい。委い事は表紙裏御覽下さい。

エスペラント初級講座

【第三講】

守
則

1. 始めエス文を読んで次の単語表によりその譯をしらべること。
2. 意味の判らぬ所は何回も音讀すること。
3. それでわからぬ場合は譯文説明を讀むこと。

單語

1. greka 希臘の。
2. oratoro 雄辯家。
3. perdi 失ふ。
4. apenau やつこ、辛じて。
5. esti ra'vita 恍惚とする。
6. parol'ado 演説。
7. partopreni 加はる、参加する。
8. ludo 遊び事。
9. plen'aga 丁年の、成年の。
10. popolo 民衆。
11. fajfi 口笛を吹く、聴衆が口笛を吹くことで、演説者に對する侮辱。
12. pen'ado 苦心、骨折。
13. kuraĝ'igi 勵ます。
14. dua provo 二度目の試み。
15. mankoj kaj eraroj 缺點と誤謬。
16. parol'maniero 辯舌振り。
17. laŭte 聲高く。
18. klare 明瞭に。
19. ŝultroj 肩。
20. kutimo 習慣、癖。
21. kruta 峻嶮な、けはしい。
22. superi 凌駕する。
23. muĝo 怒號。
24. lango 舌。
25. pend'igi 吊す。
26. ĉiu'foje, kiam ……する毎に。
27. tondi 剪る。
28. dediĉi 捧げる。
29. senĉesa 止むなき。

DEMOSTENO

Demosteno estis la plej granda greka oratoro. Li perdis la patron, kiam li estis apenau sepjara. Foje li aŭdis oratoron kaj estis ravita per la bela parolado. Li tuj decidis ankaŭ fariĝi iam oratoro. De tiu tago li ne partoprenis plu en la ludoj kaj dediĉis la tutan tempon al legado, skribado kaj parolado. Kiam li jam estis plenaĝa, li foje preparis belan paroladon kaj diris ĝin antaŭ popola kunveno. Sed oni fajfis lin kaj ŝajnis, ke lia tuta penado estis vana. Malĝoja li revenis hejmen. Amiko kuraĝigis lin al dua provo. Li laboris ankoraŭ pli diligente kaj pli flue diris la paroladon. Sed, ho ve, oni ree ridis lin. Kaŝinte la vizaĝon en la mantelon, li iris malespera hejmen. Lia amiko vizitis lin kaj montris al li la mankojn kaj erarojn de lia parolmaniero. Demosteno havis kiel oratoro tri ĉefajn mankojn: unue li parolis tro mallaŭte, ĉar li havis malfortan bruston; li parolis malklare kaj kelkajn konsonantojn li tute ne povis elparoli, ekzemple R; fine li havis malbonan kutimon, ke li levas la ŝultrojn post ĉiu dirita frazo. Sed kiel forigi tion? Demosteno ne perdis la esperon. Kion oni volas, tion oni povas.

Por fortigi bruston Demosteno suriris ĉiutage plej krutajn montojn aŭ iris al la bordo de l' maro, kiam la ondoj bruegis, kaj penis per sia voĉo superi ilian muĝon. Por bone elparoli R kaj kelkajn aliajn sonojn, li metis malgrandajn ŝtonojn sub la langon kaj tiel parolis. Por forigi la kutimon levi la ŝultrojn, li pendigis super la ŝultro glavon, kiu vundis ĝin ĉiufoje, kiam ĝi leviĝis. Fine li tondis la harojn mallonge: li ne povis eliri kaj la tutan tempon devis dediĉi al siaj studoj. Per tiaj senĉesaj ekzercoj kaj penoj li fine fariĝis la plej granda oratoro de l' mondo.

— Kabe —

デモステネス

デモステネスは最も偉大な希臘の雄辯家でした。彼はやつと七歳になつた許りの時に、父を失ひました。或時彼は雄辯家の演説を聞いて、其美しさに心を奪はれました。彼は自分も亦いつかは雄辯家にならうと、直ぐ様決心いたしました。其日以来彼はもう遊び事の仲間入りもしなくなり、あるだけの時を、読み書きと辯舌に捧げてしまひました。彼が既に成年に達した時、彼は或時立派な演説の下準備を拵へ、これを民衆の前で語りました。ところが、彼は侮辱を受けその苦心も水泡に歸して終つた様に思はれました。彼は悲歎にくれて家路に着きました。友人は彼を勵まして二度目の試みをやらせる様にしました。彼は前よりも一層勤勉に學び然も一層流暢な演説をいたしました。然し、悲しいかな、彼は再び嘲笑の的となりました。彼は外套の中に顔をかくし、落膽して家に歸つて來ました。他の友達が彼を訪れて來て、彼の演説振りの缺點や誤りを指摘しました。デモステネスは雄辯家として、三つの主な缺點を持つて居りました。第一に、彼は胸が弱かつた爲、餘りに低い聲で話した事です。彼は不明瞭に話し、或る子音例へば R などは全く發音する事が出来ませんでした。最後に、彼は一句话说毎に肩を擧げる悪い癖を持つてゐました。然しどうしたら、これを一掃する事が出来ませう。デモステネスは希望を失ひませんでした。やり度いと思ふ事は、やれるのです。

胸を丈夫にする爲、デモステネスは毎日の様に或時は一番嶮しい山々に登り、或時は波が烈しく音を立てる時海岸に出掛けて行つて自分の聲が波の怒號に打勝つ様に努力しました。R と其他二三の音を立派に發音し得る様に、彼は舌の下に小石を幾つか入れて話しました。肩を擧げる癖を直す爲、彼は肩の上に劔を吊しました。そこで劔は肩の擧る度毎にそれを傷けました。遂に彼は髪を短く剪りましたので外出が出来なくなり、あるだけの時間を研究に捧げればなりませんでした。此様な止むなき試練と努力との御蔭で彼は遂に世界に比類の無い大雄辯家となりました。

語法研究

(a) apenaŭ の用例。(1) ……するかしないかの間に。Apenaŭ ŝi venis al la fonto, ŝi ekvidis infanon tie starantan. 彼女が泉の處までやつて來るか來ない間に、彼女は其處に立つてゐる子供を見付けました。

(2) やつと、辛じて。Ŝi apenaŭ retenis larmojn. 彼女はやつとの事で涙をこらへて居りました。La libro kostas apenaŭ tri frankojn. その本は三フランちよつときれる。

(b) plu の用例。plu は時間場所に關し行爲又は状態の繼續する場合に用ひられます。例へば Mi vin ne vizitos plu. もうお訪れしないでせう。(時間) Mi ne povas iri unu paŝon plu. もう一步もこれ以上歩くことが出来ません。(場所)

(c) Malĝoja li revenis hejmen. malĝoja と形容詞になつてゐるのに御注意。日本語では此種の形容詞を副詞的に譯すので誤り易い。一例を取つて此種の關係を明かにしま

せう。Ŝi revenis sola. と云へば、sola は形容詞故文法上名詞の Ŝi を形容することとなる。従つて、“唯一人の彼女が歸つて來た” 換言すれば “彼女は唯一人で歸つて來た” となる。Ŝi revenis sole と云ふ場合には、副詞なる sole は動詞の reveni のみを形容するのが文法上の原則でありますから、事實上 Ŝi nur revenis. と云ふ意味になるか、強ひて譯せば Ŝi revenis solece の意味にしか取れません。此種の形容詞の前には通常 estante を入れて譯すと判り易くなります。

(d) kuraĝigis al …… 彼を勵まして……させた。此外 konvinkis lin al …… 等皆其結果を含んだ意味になります。Mi konvinkis lin al la edziĝo, kiun li mem ne volis. 私は彼を説得して、彼自身すゝまなかつた結婚をさせた。

(e) li iris malespera (a) と同じ。

(f) tiel parolis の tiel は、R と其他發音の出来なかつた konsonantoj を發音した事。

モンマルトルの夜

【MONTMARTRE】

シュワルツ氏の漫談

Ĉu vi scias, kio okazas?—Loulou, Nana, Dede kaj Zizi, ĉarmaj noktulinaj, kies nuraj nomoj estas tuta programo, tre serioze intencas vendi siajn peltmantelojn. Jes, tute simple, por kelkaj biletoj ili nun lasos al brokantisto tiujn grafinajn vestaĵojn, kiujn lastjare al ili pagis usonaj dolaroj. Aŭ svisaj frankoj. Aŭ anglaj funtoj. Aŭ holandaj guldenoj. Aŭ germanaj markoj. Aŭ aŭ

Ĉar la atmosfero ŝanĝiĝis sur Montmartrea monteto. Post bomba festado nun tomba fastado!

La nokt-kabaredoj ne estas plu plenplenaj. Kaj se ankoraŭ la pordisto estas ruso, la kelnero ĥalo, la dancistino hispanino, la violonisto ĉeĥoslovako, la saksofonisto negro, la kliento estas nur franco. Banala franco.

Kaj en tiuj tempej, kie ankoraŭ antaŭjare floradis lerte kulturitaj snobismo, kie riĉaj eksterlandanoj “studis” Parizon, kie konsciaj usonanoj fidele memoris la “dry”-econ de sia libera respubliko drinkante nur la plej “dry”-an “extra-dry,” kie severmoraj angloj gustumis plumbuŝe Parizan diboĉon nur por sperti,

何が起こったか御存じですか?—ルルー、ナナ、デデ、ズイズイなんていふ可愛い暗の女——これらの名前それ自體が全體のプログラモなんだ——が大真面目で自分の毛皮の外套を賣り拂はふと思つてゐるんだよ。そうだ、あいつらは僅か少しの紙幣が欲しいので狡猾な古物屋の手にあの伯爵令夫人用の衣裳を渡すだらう。——その衣裳は先年彼女等の爲米國の弗(つまり米國人の最貴客が札ビラをきつて買つてやつた意)が支拂はれたんだ。いや或ものはスイスのフランで支拂ははた。或ものは英國の磅で、或ものは和蘭のグルデンで。ドイツのマルクで。或ものは……

それはモンマルトル丘の空氣がすっかり變つてしまつたからだ。ドンチヤン騒ぎの後の墓場の様なみぢめさ!

もはや夜の居酒屋は満員さいふわけにはいかぬ。まだ門番はロシア人でも、給仕人がイタリア人であらうと、踊女がイスパニヤ人であらうと。ヴァイオリン引きがチェコ人でも、サクソホニー吹き手がネグロ人としても……お客さんは……フランス人ばかりだ。平々凡々たるフランス人だ。

まだ巧みな粹人氣取りが花ささき亂れてゐた時分には……裕富な外國人が巴里を「研究」してゐたし、心掛のよい米國人が最も「ドライ」な「超々ドライ」の盃をかたむけながら自分の自由共和國の「禁酒國ぶり」を考へて

【註】 Montmartre は巴里に於ける不夜城即ち遊蕩地域で戦後佛國のフラン貨の暴落で世界各國の粹人通人が札ビラをきつて暴れまはつた所。最近フラン貨の騰貴で外國人が退却して静まりかへつてしまつた。本文はこの事

を輕妙な皮肉をまじへて述べたものである。dolaro 弗。franko フラン。funto 磅。guldeno グルデン(80錢位)。bomba 爆彈で爆撃する様な騒しさ。festado 祝ひ。tomba 墓場のやうな静寂な。fastado 精進(食事などのき

ĉu estas vere kion oni legas en romano, ... en tiuj temploj aristokrataj ĉampano kostas hodiaŭ 70 frankojn anstataŭ 200. Kaj se la lasta kliento ne baldaŭ multobliĝos kun kunikla rapideco, certe alvenos la tempo, kiam senkonsola mastro denove cedos al postuloj de l' vivo kaj tiam eĉ — plena proletario povos por du franketoj akiri en mondumaj noktaziloj honestan duonbotelon da alsaca biero.

Ĉar amase la fremdlandanoj forlasis Parizon, kaŭze de revalorigo de l' franka valuto. Kaj nur la fremdlandanoj vivigis tiujn kabaredojn, kie komprenema polico toleris, kion aliloke severa kontrolo neniam sukcesis malhelpi. Tiu flanko de Montmartre neniam estis speciale franca. Ĝi estas internacia. Internacia per siaj malvirtoj, internacia per siaj aktoroj kaj publiko. De Francujo ĝi havas nur la vinon kaj nehipokritan toleremon.

Ĝi pereas. Kaj poste?

Montmartre ne mortos, ĉar ĝi havas aliajn flankojn pli interesajn. Sed eble de nun la nokto estos pli pura kaj la stratoj pli silentaj. Fine mi povos dormi seninterrompe ĝis mateno.

Raymond Schwarze

あるし、其風美俗の英國人が徹底的に遊蕩振を發揮して小説にでゝある事が本當かどうかを驗そうとしてゐる…… これら貴族向の殿堂でシャンパンも二百フランの高値から今日は僅か七十フランになつてゐる。そしてもし此頃の客がすぐにも脱兎の勢で激増しない限りはあはれな亭主は生活の要求に讓歩をよぎなくされて、ふさぎこんであるプロレタリアさへ二フランでこの世界的の夜の逃避所での半蠟のアルザスビールを傾むける時がやつてくるだらう。

それはフランが騰貴したので外國人達は隊をなして巴里を退却したからだ。實はこの外國人がこれらの居酒屋をさへへてゐたわけだ——それでこゝでは警察も氣をきかせて何事も大目にみてゐた……こんなことはどこでもいくら嚴重にしてもだめなものだ。

モンマルトルのこの方面はまったくフランスでも何でも無い。それは全く國際的のものだつた。その淫蕩を以ても國際的でありその俳優達並に民衆を以てしても國際的であつた。それはフランスからたゞ酒と偽善的ではない寛大を提供して貰つてゐたにすぎない。

今それは滅びようとしてゐる。今後はどうであらう。

モンマルトルは尙一層興味の深い方面を多分にもつてゐるから決して滅びはしない。併し今後は夜は一層純潔なものになり街は靜寂になるであらう。そしたら僕も朝迄おちついて寢られるさういふものだ。

(El Heroldo de Esp.)

はめて簡略なること)。snobismo 氣ごること、時流時好を逐ふ事。“studi” Parizon の studi は皮肉つていつたもの。fi'fidele 馬鹿まじめに。dry (seka の意)は英語で酒氣のないことを示す。“dry”-eco 禁酒國ぶり(米國は禁酒

國だから)。“dry”-an “extra-dry” の意味は判らないが“dry”-an は皮肉つて反對の語を用ひたのかと思ふ; “extra-dry” は酒の名かと思ふ。alsaca アルサス産の。kompren'ema わかりのいゝ、カンのいゝ。toleri我慢す。

關東震災歿死者名簿埋藏由來記

Pri la Deveno de la Enterigo de la
Nomaro de la Mortintoj ĉe Kantoo-Tertremo

Jam pasis kvar jaroj de la tempo, kiam la granda tertremego kaj fajrego detruis la ĉefan parton de Tokio, ĉefurbo en nia lando. Sed ankoraŭ nun antaŭ niaj okuloj montriĝas neforgeseblaj teruraj bildoj de tiu tempo. Pli kaj pli rekonstruiĝas nova urbo sur la ruino. Tamen la animoj forprenitaj ĉe la katastrofo neniam revenas sur la teron. Por konsoli la bedaŭratajn viktimojn oni konstruis memorigan turon sur la sankta monto Koojasan. Kaj sub ĝin oni enterigis la nomaron de mortintoj kune kun ĝia deveno, skribita de S-ro Hidejiroo Nagata, Eksurbestro de Tokio. La teksto estas tradukita en Esperanton kaj anglan lingvon por konservi ĝin kun ĝiaj tradukoj por dek mil jaroj. Ni kun kondolenco publikigas sube japanan tekston kaj esperantan tradukon.

Rim. de Red.

大正十二年九月一日午前十一時五十八分關東地方に突發したる大地震並に次ぎて起りたる大火災は死者十萬焼失戸數四十萬に達し洵に有史以來空前の慘事たり、當時余は東京市長として市役所に在り、激震三回の後、餘震頻りに起りて市中の混亂は刻々に加はり、火焰四方を蔽ひて天日全く闇く、薄暮に及んで難を宮城前に避くる者已に數十萬に達し、市役所庭内亦立錫の餘地なし、余は吏員を督して門内に天幕を張り應急の處置に務めしが、余の後方には陸續として運ばれ來る火傷者の蓆の上に横臥して或は死亡し或は苦痛を訴へて呻吟するの聲耳底に徹し悽愴悲慘實に名狀すべからず、殊に其夜本所區被服廠跡に於ける約四萬に近き避難者は天を焦す火焰の爲に悉く鑒殺せられ死屍累々として雨露に委れ、臭氣日を迫ふて加はり如何とも爲すべからず當初余は成るべく屍體を柩に納めしめて各々其遺物を存せむ事を希ひたるも其現状を見るに及んで止むを得ず涙を揮つて即時に之を火葬すべき事を決したり、而して之を行ふには凡て夜間に於てせしが日數週餘に及びて、白

La granda tertremo, kiu neatendite okazis en Kūantoo-Distrikto je la 58 minutoj post la 11-a horo antaŭtagmeze en la 1-a tago de Septembro de la 12-a jaro de Taiŝoo, kaj sekve aperintaj grandaj brulegoj mortigis cent mil personojn kaj forbruligis kvarcent mil domojn; tio ja estas la plej domaĝa katastrofo, kiun nia historio travivis. En tiu momento mi, urbestro de Tokio, estis en la Urba Domo. Post tri grandaj tremoj, tremetoj sin sekvis kaj momenton post momento grandiĝis la konfuzo en la urbo. Flamo kaj fumo kovris ĉiun direkton, mallumigante eĉ la sunon. Je la vespero kelkcent mil elkurintoj rifuĝis en la placon antaŭ la Imperiestra Palaco. Aakaŭ en la korto de la Urba Domo sin trovis neniam da vakanta loko. Mi instigis la oficistojn starigi tendojn antaŭ la domo kaj respondi urgajn bezonojn. Malantaŭ mi estis alportataj sinsekve brulantaj personoj, kiuj kuŝante sur matoj aŭ mortas aŭ plendas dolorojn kun ĝemoj, kiuj tiel terure atakis miajn orelojn, ke mi neniel povas ĝin esprimi. Cetere tiun vesperon ĉirkaŭ kvardek mil rifuĝintoj en Hifukuŝoo-ato (la placo, kie antaŭe staris la Milita Vestfabrikejo), Honĝo Kvartalo, estis ĉiuj mortigitaj de flamoj bruligantaj la ĉielon. Kadavroj sur kadavroj, lasataj al pluvoj kaj rosoj, ĉiutage pli kaj pli rancis tiel, ke oni ne sciis kion fari. En la komenco mi deziris enmeti kadavrojn kiel eble en ĉerkojn, konservante iliajn respektivajn restaĵojn. Tamen

骨丘を成し深更の秋天愈々澄みて黒煙高く騰り月明の下焦土の底に光れる隅田の水を隔てて冷風異臭を送り来るの光景は眞に人をして顔を蔽はしめたり、畏くも皇室に於ては深く憐愍の情を垂れさせられ、十一月十九日始めて追弔の祭を被服廠跡に行ふに當り、兩陛下を始め奉り各宮殿下より供物を賜はり、殊に皇后陛下には格別の思召を以て新宿御苑の菊花を祭壇に供へしめられ幽香馥郁として靈前に薫り參拜の遺族等仰ぎ見るもの覺えず涙を垂れざるはなく、地下の萬靈も亦均しく皇恩の厚きに感泣せるを想はしめたり、高野山金剛峯寺は當時直ちに慰問團を組織して遭難地を訪ひ、余に謀りて歿死者の分骨を持ち歸りて盛大なる供養を營み、又此靈地に於て紀念塔を建つ、思ふに洪大なる佛徳の冥護は是等不慮の天災に斃れたる諸靈の萬斛の憾みを慰むる事を得んか、余昨春四月此地に來りて深く其美舉に感じ、更に死者の氏名を記したるものを塔下に埋めて永く其冥福を祈らむ事を念ふ、今に於て當時を回想すれば茫として皆夢の如し、死者果して何の罪業がある、生者果して何の功德がある、余の如きも亦幸に天祐を以て斯身を全うし、生きて尙茲にあり死者の慘狀眼底に新たにして斷腸の念永へに去り難し、希くは幽魂靜かに此靈域に鎮まり瞑らむ事を。

紀元二千五百八十六年

大正十五年九月一日

震災後三週年の日

前東京市長 永田秀次郎識

rigardinte la staton mem, mi decidis kun larmoj ilin tuj kremacii. Oni plenumis tion ĉiam en nokto tra pli ol semajno. De la monteto de blankaj skeletoj suprenfl gas nigra fumo alten en noktomezan aŭtunĉielon tre puran. Malvarmeta vento alblovas malbonodoron trans Sumida Rivero brilanta meze de la ruinego sub la lunlumo. Ĉe tia sceno ĉiu ja kovris sian vizagon pro terurigo. Nia adorata Imperiestra Hejmo esprimis profundegan kompaton por la mortintoj. Ĉe la unua kondolencia ceremonio, okazigita je la 19-a tago de Novembro en Hifuku-ŝoo-ato, Iliaj Imperiaj Moŝtoj Geimperiestroj kaj Geprincoj donacis oferaĵojn, precipe Ŝia Imperia Moŝto Imperiestredzino kun speciala ĝentileco oferis al la altaro krizantemflorojn el Ŝinjuku Imperiestra Ĝardeno. Ilia bonodoro ĉirkaŭŝebis kaj ĉiuj restantaj familianoj de la mortintoj vole-nevole larmis adorklinigante antaŭ ili. Ŝajnas, ke la animoj subteraj same dankploras pro la afabla boneco de la Imperiestra Hejmo. Kongoobuĵi de Koojasan (Budaisma Templo), tuj organizinte konsolantaron, sendis ĝin al la domaĝa teritorio kaj post la konsulto kun mi kunportis partojn de la skeletoj de la mortintoj al sia monto por okazigi solenan servon por ili. Krome oni konstruis ĉi tie sur la sankta monto memorigan turon por la mortintoj ĉe la neatendita katastrofo. Ilia senfina bedaŭro espereble estu konsolata de la grandioza beno de Budao. Mi venis ĉi tien en Aprilo de la lasta jaro kaj estis tute kortuŝita de la sankta entrepreno. Tiam al mi venis ideo aldone enterigi la nomaron de la animoj. Nun rememorante tiujn tagojn, mi kvazaŭ estas en sonĝo. Ĉu la mortintoj havis iun ajn pekon? Ĉu la vivantoj havas iun ajn meriton? Mi, miaparte, tute feliĉe min savis dank' al Dio kaj nun vivadas. La domaĝa sceno de la mortintoj denove min turmentas en mia imago kvazaŭ por eterne. Elkore mi esperas, ke la bedaŭrataj animoj trankvile spiradu en tiu ĉi sanktejo.

Je la 1-a de Septembro de la 15-a jaro de Taiŝoo (la 2586-a jaro de Jimmu Erao), la tria datreveno de la tertremo, skribas Hidejiroo Nagata, Eksurbestro de Tokio.

(Esperantigita de Masuzo Inoue)

Zamenhof の著書より

[2]

松本清彦

二三の實例を掲げて *trafi* の用法を研究しませう。

a) La unua doloro, kiu *trafis* la ĝis tiam sennuban vivon de la bela, gaja kaj vigla knabino, estis perdo de la patrino. [譯] 美しく陽氣で快活な乙女の其時と云ふ其時迄曇り無い生涯に起つた(陰影を投じた)最初の悩みは母を失つた事でした。(P. 14)

b) La sorto, kiu *sin trafis* tute ne estis ia sorto escepta. [譯] 彼女の遭遇した運命は別に例外的なものではなかつた。(P. 17)

以下便宜上他の書物から引用します。

c) La nova verko *trafis* bonan akcepton. [譯] 彼の新刊書は好評噴々たるものであつた。

d) Kelkaj *trafis* en la manojn de la polico. [譯] 或者達は警察の手に渡つた。

e) La veturilo *trafis* en la kavon. [譯] 車は凹地へ落ち込んだ。

此外にもまだ *trafi* の變つた使ひ方が多々ある事と思ひますが、要するにその執れを取つて見ても元來の意味、～命中する、中る～を場所々々に應じて面白く使つたに過ぎぬものですから、よく Zam. の用例を學んで、此活用範圍の廣い然も *nuanco* に富んだ言葉を生かしてゆき度いものです。

Celi ～ 目當とす、照準とす。此言葉は名詞(*celo*)として用ひられる場合の方が多様ですが、動詞に用ひた二三の例を挙げれば

a) *Ŝi penis certigi al si en la animo, ke la kanteto celas ne sin*,……. [譯] 彼女は自分が其小謠の對象になつてゐるのではないのだと心中獨り定め込んでしまはうと致しました。(P. 12)

b) En la larĝaj, belegaj stratoj, homoj ankoraŭ iris, veturis, *celis* plezuron, …… [譯] 廣くて美しい街々には未だ歩いて行く人々や乗つて行く人々、歡樂を求めて行く人々が居りました。(P. 18)

又例へば *Ŝi instinkte ekrimarkis, ke ilia interparolado celis sin mem*. [譯] 彼女は直感的に彼等が自分の事を話してゐるのに氣付きました。の様な場合に *celi* は……, ke ili interparolis pri ŝi mem などより面白い役目を務めてゐると思ひます。

(5) 數量的差違に關する *per* の用法

これは例へば「私よりは彼の方が二歳だけ

年上だ」のだけに概當する字を *per* で表はす様な場合です。普通數量的關係は目的格にするここに依つて簡単に表はされますので兎角 *n* 一天張りになり勝ですが時には *per* の使用も悪くはないと思ひます。

a) Tio estas mia kuzino, malpli juna ol mi *per* kelke da jaroj. [譯] あれは私より五六歳年下の従妹です。(P. 113)

b) Tiuj personoj forte diferencis inter si *per* la aĝo, ………. [譯] それ等の人達は年格好がひどくちがつて居りました。(P. 23)

(6) *por* と *kontraŭ* さに就て

Por は *pro* と相竝んで種々な場合に使用され、比較的まぎらばしい前置詞ですが、今其中で、*por* と *kontraŭ* が交換の意味に使用される用例を掲げ、之に就て卑見を述べませう。

a) La juna vidvino *por* la iom da spesdekoj, kiuj restis al ŝi, *aĉetis* iom da butero, ………. [譯] 若い寡婦は残つてゐた僅かの小錢を出して、少し許りの牛酪を買ひ求めました。(P. 70)

b) Post kelke da tagoj ŝi jam ne havas *por* kio *aĉeti* nek tagmanĝon *por* vi kaj *por* si. 五六日も経てばお前の爲にも自分の爲にも贅御飯を買ふだけのものさへなくなつてしまふだらうよ。(P. 44)

por kio *aĉeti*…… は、それを渡して買ひ求め得る所のもの、と云ふ意味で、佛語の *de quoi* がこれに概當する様に思はれます。又此種の *kio* の用法は Marta の中にも所々に散見します。

Ili ne havas, *kion manĝi*, ili ne havas, *per* kio *hejti* la fornon……. 彼等は食ふに食ふ物もなく、爐に炬く物もない仕末でした。(P. 115)

上記の *por* の用法は左程目新しくもありませんが、*kontraŭ* を *por* と全く同様な交換的意味に用ひた例は少くとも私達若輩には珍しいものです。この用例は便宜上 *Fabeloj de Andersen*, Vol. I より引用します。

Sur la returna vojo li renkontis du lernejkamaradojn el pli alta klaso, kiuj *aĉetis* de li la birdon *kontraŭ* kelke da spesdekoj. [譯] 歸途彼は上級の學友二人に出會ひました、其二人は例の小鳥を五六錢で彼から買ひ取りました。(P. 89)。

單語研究雜話

[11]

川崎直一

43. Vortaro (續き)

それから kunmetita vorto の多い Millidge のエス英, 簡單で新味のある Bennemann のエス獨, フランス語の delikata nuanco を心にくきまで traduki した Grosjean-Maupin の佛エス, 語数の多い Long の英エス, 日本の醫者仲間にもてはやされている Christaller, Bennemann の獨エス, 皆信頼すべき一流の著である。

最新刊の Wüster, *Zamenhof-Radikaro* は oficiala 以外の Z. radiko と *Krestomatio*, *La Esperantisto* に出たすべての radiko を集めてその出典を示したものである。これで見ると japan' 以外に japon' が大分使われた事がわかる。Neoficiala radiko の研究にはもつてこいの著述である。

44. Propraj nomoj.

ちよつと考えるに極めて簡単だが、深く調べれば調べる程難しくなるのは發音と固有名詞の問題である。Esp. の alfabeto で發音通りに書き直す方法をどこまでも押通せばよいと言う人もあるかも知れないが、Londono や Ameriko の場合のように、いつもうまくゆくと思つたら大間違いである。Oser がフランスの Auxerre を Ŭajt がイギリスの Wight を transskribi したものだとは 外國人はおろか、本國人でも恐らく見當もつくまい。こいつて Auxerre, Wight 等とその儘で文章の中へ入れられると外國人はそれをどう讀んでよいか大に困る。こんな場合には面倒くさいが Auxerre(oser) のように proksimuma elparolo をつけておく事にしたい。「丁度我々が人類のすべてが各々の國語と共に國際語を話す様になるのを理想としている如く、すべての固有名詞が nacia formo の外に必ず Esperanta formo を持つ時代が來た時にこの問題は徹底的に解決せられる」と Cart が *Literatura Informilo* (Hirt 書店發行) で言つたのは尤である。一日も早くこんな時代が來てほしい。

Gaston Moch (Mok と發音する), *Pri la Transskribo de la Propraj Nomoj* には Moch, Zakrzewski, Schröder の scienca studo と Moch, Schröder, Bein の propono にかゝる listo de geografiaj, historiaj kaj personaj nomoj がのつている。

45. bibliografio.

Esp. 書の bibliografio (書籍解題)としては Davidor のと Esperantista Centra Oficejo のさが有名である。Davidor という人はおよそ Esp. に關係のあるものなら本、雑誌等から宣傳ビラに至るあらゆるものを集めたロシヤの銀行家である。後者は decimala klasifiko によつて分類してある。この decimala klasifiko をどのように Esp. 書に應用すべきかを示した本が The British Esperanto Association から出ている。

46. konkordanco.

もし Zamenhof の使つた radiko, kunmetita vorto, frazo 等をその用例と共に全部集めた Zamenhof Vortaro が出版されたら Esp. 研究者のうける便利は實に大きなものだろう。

現在では Z. の著作の一部分を取扱つたものしか出ていない。先きに紹介した Zamenhof-radikaro の外には Wackrill, *Zamenhofaj Vortoj* と Boulet, *Du Mil Novaj Vortoj* がある。Wackrill の本は *Ekzercaro*, *Hamleto*, *Fundamenta Krestomatio*, *Revizoro*, *Rabistoj* にあつて *Universala Vortaro* にない言葉を集めたものである。例: *cirkumcid'* Rab 17, 19: mi per stranga okazo estas jam antaŭe *cirkumcidita*. Boulet の方は Z. の著書から拾つた單語に佛英獨西伊露波の譯を與えている。例: poem' K.(=Krestomatio) p. 305 l.(=linio) 17—poème | poem | Dichtung | poema | poema | poema | poemat. (*Universala Vortaro* の單語だけに各國語の譯をつけたものは Bastien, *Naŭlingva Etimologia Leksikono* であるが Boulet のは此本の續編の様なものである)。

Konkordanco (要語索引)には出版されたものに *Ekzercaro*, *Sentencoj de Salomono*, 原稿が出來てはいるがまだ出版されないものに *Marta* がある。*Ekzercaro* の例をだすと: FACIL—oni forgesas facile, 18, 19; Dio facile pardonas, 22, 4; povas facile malvarmumi, 42, 11. 即ち facile は *Ekzercaro* の第18章19, 第22章 4, 第42章 11の3箇所に見えている事がわかる。

單語の意味を深く調べるのには vortaro の定義だけでは不十分、是非文章の中に使われた實例を見なければならぬが、その時に以上の書が役に立つ。

和文エス 譯添削欄

〔第 二 回〕

編 輯 部

1. 彼は金を盗んだだけならまだしも人殺しさへやつたのだ。

Li ne nur ŝtelis monon, sed (ankaŭ) mortigis homon.

これは ne nur……sed ankaŭ (又は ne sole……sed ankaŭ) の練習として提出したのです。ankaŭ は略してもよいのです。人殺しを faris hommortigon としたのもあるが誤ではないが重苦しい。murdi を使はれた方も二三あつたが、これは惨殺の意味で mortigi よりもずっと強い意味になる。ne nur……eĉ とか……ankoraŭ とかあつたが之でも意味はされないこともなかろうが上の慣用句を用ひるのがよいのである。

2. 彼に比べて私は彼女を餘計に愛してゐるつもりだ。

Mi kredas ke mi amas ŝin pli multe ol li.

kredas は opinias, pensas でもよい。又 mi estas certa, ke など面白いと思ふ。全然同一ではないが上の日本文ではどうさでもされるから。「彼に比べて」と書いたのは li が主格と同格である事をしめすためである。私は彼女よりも彼を餘計愛す、と云ふ日本語では mi amas ŝin pli multe ol li とか mi amas ŝin pli multe ol lin とかどちらにもされるから。mi ŝajnas ami ŝin pli ol li といふのがあつたがよくない。

3. 出あひ頭に口論をおつ始めた。
Tuj kiam ili renkontiĝis, ili komencis disputi.

出合はすや直ぐにの意故 tuj kiam…… とした。tuj kiam……ili renkontis sin reciproke とか ili renkontis unu la alian としてもよろしいがこれを簡単に表はすため renkontiĝi としました。tuj kiam komencis disputi, ili renkontiĝis といふのがありましたがこれでは「口論を始めるや否や出合つた」となつて滑稽です。又 apenaŭ を使つた方も大部あつたが tuj kiam よりは時間的關係がもつと切迫してゐる様に感ぜられます。つまり會ふか會はぬ中にの意味になります。無論これでも差支ありません。

4. 一本(酒を徳利に一本)ひつかけたにすぎないのさ。

Mi trinkis nur unu botelon da vino (又は sake'o).

すべて「のむ」ことは trinki です。drinki とは alkoholajo を trinki してのんだくれる事です。それ故 drinki vinon といはぬが普通。nur の位置が色々でしたが unu botelon の前が適當。trinki unu botelo da vinon とした人があつたが大まちがひです。酒をひつかけけるを versi unu botelon da vino とした人が三四人もありましたが、これは日本語の直譯から來る大きな誤です。

5. 用があつたらいつでもよんで下さい。

Alvoku min, kiam ajn vi bezonas min.

voku でもよい。kiam ajn の次は vi havas aferon je mi でもいゝでせう。Kiam ajn alvoku min ĉe okazo といふのがあつたが kiam や kiam ajn の用法を全くはきちがへてゐる様だ。「kiam ajn=何時でも」としてどこへでも自由に使用してはエス文にならない。Kiam ajn……, ~ ~ といふ風なのは公式として全體をおぼへておかねばならない。とかくいゝ加減に諳記してなくといつまでたつても上達しない。

6. 昨晚は試験勉強で夜通しした。
Mi maldormis la tutan lastan nokton por prepari por la ekzameno.

寝ないでおきてゐる事を maldormi といふのです。la tutan nokton 一晩中。lastan をいれて昨晚一晩中の意としました。試験勉強を pro la studo de l' ekzameno としたのが多かつたがこれでは試験といふものゝ研究といふ事で試験徹廢のためお役人が ekzameno といふものゝ studo のためにする studo の様にもされない事がないから prepari とした(勿論これでも試験官の方にもされるが)方がおだやかだと思ふ。tranoktis la lastan nokton といふのも大分あつたが、これでは夜通した意味にはならない。tranoktis は pasigis la nokton の意味で普通泊つた場合に云ふ。夜通

しは maldormi でなければだめ。Zamenhofa na esprimo で次の様にエス譯しても面白いと思ふ。En la daŭro de l' tuta lasta nokto, mi sidadis *super* libroj por esti preta al la ekzameno.

7. 何か腹痛にきくよい薬を御存じありませんか。

Ĉu vi ne scias iun bonan medikamenton por ventrodoloro?

medikamenton efikan por…… さしてもよい。iun を iu と主格にしたのが多かつたのは遺憾。薬を *medicino* としたのがあつたが *medicino* は醫學で薬ではない。(英語とちがふ)。

8. 御母堂様によろしく御鳳聲願上候。

Transdonu mian koran saluton al via estimata patrino.

上の様に譯するのが最もよい。(直譯すれば私の心からの挨拶をあなたの尊敬する御母さんへおつたへ下さいとなる)。Mi petas vin diri al via patrino pri mi. さいふのがあつたが日本語の直譯でよろしく御鳳聲の意とはならない。私の事をお母さんに話して下さいさいふ意味になるだけです。

9. 下女が障子の蔭で秘密話(會話)を立聞した。

Malantaŭ la skreno la servistino subaŭskultis la sekretan interparoladon.

障子をかりに skreno としておいた。めすみきく事を subaŭskulti さいふ。la servistino ŝteraŭdis en posto de la skreno la nia konversacion さいふひごいのがあつたが r と l とのまちがひはすいぶん多い。名詞が目的格でその形容詞がそのまゝになつてゐるのなごもう少し應募される際に氣をつけて書いていたゞきたい。必しも六ヶ數問題に明答をだされなくて結構です。もつとやさしい所で誤の多いのを遺憾とする。

10. 走つたり歩いたりして歸つてきました。

Jen kurante, jen marŝante, mi revenis hejmen.

kurante aŭ marŝante さかゝれたのもありましたがこれでは十分上の意味がでない。

jen……jen が最もピッタリとあてはまる。

11. 何がおかしくつて笑つてゐるのです。

Pro kio vi ridas?

Je kio ……? 又は Kion ……? でもよい。Kial vi ridas? でもまちがひではないが一寸意味がちがふ。

12. 申し兼ねますが水を一杯もつて来て下さい。

Ĉu mi povas peti vin ke vi alportu al mi glason da akvo?

Pardonu min ke…… とした人もあるがエス語では *pardonu* は主として悪い事をした時か失禮な事をした時にゆるしを乞ふのに用ひるのが普通であるからこゝなごではつかはない方がよいと思ふ。

13. あなたはごなた様でございますか。

Al kiu mi havas la honoron alparoli?

Kiu vi estas, sinjoro? でも差支へはないが多少不丁寧な云ひ方である。上の様に云へば丁寧ないひ方になる。(直譯すれば私は一體ごなた様に話しかける光榮をもつのでございませうと云ふ事でつまり私は今ごなたにむかつて話してゐるのでせう御名前を御きかせ下さいの意である。)

14. あなたにおちかづきになることは大變なよろこびでございます。

Al mi estas granda ĝojo konatiĝi kun vi, sinjoro.

上の文で *kon'at'ig'i* (kun vi) が文の主語である。普通の順序にすれば *Konatiĝi estas gr. ĝojo al mi.* となる。

15. 不意に一つの人影があらはれて彼女をさらつてゆきました。

Subite aperis unu homa figuro kaj ŝin forkondukis.

人影を ombro de homo と譯したのがあつたがそれは日本語の直譯で日本語の人影とは人の姿の事で ombro ではない。さらつてゆくは forlogi, forrabi, forkaptis でもよい。

★第三回課題は 第十號 275頁にあり★

La Faraono

【泰西エス文藝梗概紹介】

[2]

曾 根 一 郎

23. 前述の通り Ramzes は謹慎の意を表して蟄居して居る。母后 Nikotlis と Herhol は或日舟をナイルに浮べて、Ramzes の隠棲して居る Sara の bieno の近くへ漕がせて来る。これを見て Ramzes は自ら小舟をあやつり Sara を乗せて、母后の舟に近づき、豎琴にあはせて Sara に歌はしめる。母后 Nikotlis はたゞ Sara の美聲を感嘆して居るが Herhol はその歌が帝王と *cefepiskopo* の外は聞くことさえ許るされない秘密の祈禱歌であることを知つて居るので、急いで舟を漕ぎ戻らしめて歌を聞かなかつたことにしてすませる。若しそれが知れわたつたら、Sara は否應なしに *blasfemo* として重い處罰を受けなければならなかつたが、Herhol は好意で此事を不問に附すことにしたのである。此日 Herhol は Sara が既に Ramzes の種子をやごして居ることを、母后 Nikotlis に耳うちして、二人は若し男子が生れたら、之をユダヤ人の王に爲やうと相談する。ところが Ramzes 自身はまだ Sara の妊娠したことを知らない。

24. Ramzes の謹慎の誠意は遂に認められた。父王が國內巡視の歸途のお出迎への對面の節に、Ramzes は *Vic-rego* として *malsupra Egipto* の統治權と *Memfisa Korpuso* の指揮權を與へられた。彼の永年あこがれて居た地位が天降つたのである。その喜びは感謝の涙として父王の膝の上に注がれた。彼はまた此事が Herhol の好意ある取りなしによることを感知して、深く Herhol を徳さする。

25. Ramzes は *Vic-rego* として、最初の數日間ヘトヘトになつてしまふ。無数の人が、あらゆる階級の役人、外交官、人民に至るまで、彼の面前に出て祝辭を述べる、訴へ事をするといふ調子、彼は全くポーズとなつてしまふ。其處へ Herhol が出て来て、帝王學を仕込む。『如何に精力絶倫の人間でも、無数の人民の個々を相手にして政治を行ひ得るものではない、その爲めの政治組織があるのだから、それを總攬するのが最高の地位にあるもののなすべきことだ。』……暗に Ramzes が直接人民の苦しみを救助しやうとした行爲を子供らしいとたしなめながら、政治の要諦を教へる。Herhol は云ふ『エジプトが他の

國々にまさるところは、つまりその組織にある。ヒラミッドは此の組織を形象にあらはしたもので、最頂點の一人が最下の總べてを統べ治むることを示したものである』云々。

26. Ramzes は又父王からも帝王學を授けられる。そして國庫の歳入が年々減少し、一方歳出が年々増加するので、非常な危機にあるから、お前はよくその理由を實地に探求せよと命ぜられる。Ramzes は命を奉じて各地方を巡視する、役人共は彼の目と耳を覆ひかくして、眞實を見せまいとする。一方では盛大なる宴會を催し、美姫を侍せしめて心なその方へ傾かしめようとする。ところが宴たけなはにして一切の燈火を消し、淫樂の天國を現出して居る時、突如として“*Vic-rego*……*Ramzes*……”と連呼しつつ暗黒の宴席へ浸入して来る怪漢がある、女の叫び聲、器物の破れる音すさまじい間にやつと燈が點ぜられて、件の怪漢はさらへられた。Ramzes は美姫を左右に擁しながら、怪漢にその不作法を詰問する。怪漢は實は直訴人である。彼は人民塗炭の苦しみを直接 Ramzes の耳に入れんとしたのである。Ramzes は之をきくと同時に、その淫樂の宴席を去る。そして明日あらためて詳細に下問すべく、役人の手に直訴人をあづける。ところが翌朝までには直訴人は既に毒殺されてしまひ、Ramzes は遂に眞實の前に明盲にされてしまふ。Ramzes の不機嫌をなほすために、*Nomarho* は花を盛つた黄色の舟型の乗物に美しき娘を乗せ、Ramzes の寢室の屋根から天降らせる。Ramzes は此天降りの美女が一夜の枕席に侍しての口説きおとしには、難なく降参してしまひ、直訴人の壊した器物代まで御手許金から辨償してやる。

27. 一體 Ramzes には二つの性格があつて時と場合によつて、随分變なことになる。彼は一面非常に豪華なことが好きであるかと思へば、一面粗衣粗食まつたくの一兵卒と同様な衣食に平氣で生きて居る。彼は人民の生活を豊富にしてやると同時に、帝室の寶庫を充實させやうとして居る。然して彼には歳入の増加をはかる道は、唯一つ *Asiria* を征討して、巨億の財寶と幾萬の奴隸を拉し来る外に

方法はない。此點が Herhol 等の平和論者と
はごうしても相容れない。

28. Asiria の國境を守備して居る老將軍
Nitager も又 Ramzes と共に Asiria を征討し
なく脾肉の嘆をもらして居る。此の老若二人
の意氣が投合して結び付いたら、戦争はごう
しても避けることは出来なくなるであらう。
Pastraro は此事を最大の頭痛に病んで居る。

29. Asiria の方では若き Ramzes の資性
の英邁なること、老 Nitager 將軍の恐るべき
智勇さを知つて居るので、何さかして戦争を
避け、平和的競争のうちに Egipto を壓倒
してやらうと云ふ考へで居る。そこで傑僧
Beroes を密使として Egipto の Pastraro の
主腦者と秘密條約を締結せしめる。

30. Beroes は奇蹟を演じて、Herhol や
Mefres 等を信服せしめる。その秘密談判の
席には Herhol の秘書 Pentuel も同席して居
る。Beroes は彼等三人を説伏して十年の平和
を約せしめる。彼等はごうも天文上來るべき
十年間はエジプトの上に非常な危機が迫つて
居る。斯かる際他國と事をかまえるのは自ら
進んで國家を滅亡の淵に投げ込むやうなもの
だ。とすつかり Beroes に脅かされてしまふ。

31. そこで来るべき十年間にエジプトの
國勢を挽回すべく、Herhol は自らは政治及
び軍事の總括にあたり、Mefres をして宗教
的に國民精神を統整せしめ、Pentuel をして
大いに民の福利を増進すべく努力せしめる事
にする。

32. 處が Beroes の云ふ天文に現はれたエ
ジプトの危機さは、實は Asiria が Fenicia
を手に入れるために必要な期間だけ、エジプ
トが横槍を入れたり背後から擲みかかつて來
たりしないやうにエジプトの兀鷹の爪を封ず
るための策略であつたのだ。

33. Ramzes は父王から命ぜられた國庫歳
入減少の眞因をどうも思ふ様に調べ得ないで
困つて居たが、寺院に於て苦行を積んだ後僧
侶から教へてもらふことになつた。その僧侶
は Pentuel であつたが、彼は種々の圖形を利用
して古今の Egipto の貧富の懸隔状態をた
くみに説明し、Egipto が今日の如く貧乏し
て居るのは偏に Fenicia の procentegisto の
ためであると結論した。Ramzes も心ひそかに
自分が Dagon から山の如き借財をして居
ることをはちて居る。

34. 然るに Fenicia 人等は力さたのむ
Ramzes に見はなされては堪らぬ、Ramzes が
見はなせば、彼等は一たまりもなく僧侶及寺

院の手で國外に掃き出されてしまふであら
う。そこで彼等は最も巧妙な方法で再び
Ramzes に取り入る工夫をする。

35. Sara は男の子を産んで、Ramzes の居
る宮殿の中に移り住む。Ramzes は子供の愛
にひかれて萬事を忘れて居る。處が或日宮廷
の役人や兵士や女官等が給料不拂のために騒
いで居ることを聞かされ、再び Tutmozis を
使つて Dagon を召し寄せ、御用金を命じや
うとするが Dagon はたゞメソメソ泣くばかりで、
自分のかはりに Hiram を推薦する。Hiram は
非常な策士で、大金を立ち所に御用立てする
のみならず、Beroes と Herhol 等の密約を
探ぐり出して Ramzes の僧侶等に對する
激怒をあほりたてる。

36. Ramzes は初、寺院に於ける苦行中
に見せつけられた種々のことを奇蹟と信じて。
此の奇蹟を行ひ得る僧侶の力を恐るべきもの
と思つて居たが、Hiram が此等の奇蹟をす
つかり種子あかしするので、彼はますます僧
侶の奸佞邪智を憎むやうになる。その種子あ
かしのために Hiram は Ramzes を Fenicia
人の信仰する寺院に招いたことがある。そこ
で Ramzes は二人の人物に遭ふ。一人はギリ
シヤ人 Likon で、彼はその寺院の kantisto
である。一人は Ramzes の若い魂をふらふら
とさせた美しき若き尼僧 Kama である。

37. Kama は fenicianino で、かつて
Dagon の使として、Ramzes の前で「御怒り
拂ひ」の舞を舞つた女であるが、その時には
まるで Ramzes の目の前を影の如く通り過ぎ
たに過ぎなかつたが、今は毒の刺のやうに
Ramzes の心臓に突きささつたのだ。Ramzes
は月夜ひそかに Kama の住む寺院のほそり
をさまようやうになつた。Likon は kantisto
であるが、心から Kama を愛慕して居る。
そして Likon はその身長から相貌身振りの
末に至るまで Ramzes に生き寫しである。そ
こに運命の悲劇の種子は秘されて居たのだ。

38. Fenicia 人等はしきりに Ramzes を煽
動して Asiria 征討の軍を出さしめやうとす
るし、Pastraro は何さかして Ramzes に響を
はませ、Fenicia 人等を國內から拂き出さう
とさせて居る。そこで相互にしのぎをけづつて
策戦の妙を競ふことになる。ところが此時
Libia の國境が騒がしくなつて來た。父王
Ramzes 12 世は老衰いよいよ其度が加はつ
て、何時如何なる事になるか豫想がつかぬさ
いふ有様である。

(つづく)

新 刊 紹 介

【BIBLIOGRAFIO】

堀 眞 道

★**HISTORIO DE LA LINGVO ESPERANTO**, de Edmond Privat, 13×19 cm., p. 200, prez. Rm. 6, eld. Ferdinand Hirt & Sohn E-to-Fako, Leipzig Germanujo, 1927.

「ザメンホフの生涯」で有名な Privat 氏の近著。エス語發表以來 1900 迄の歴史は第一巻とし出版され、之れはそれにつぐ第二巻である。1900-1927 のエス語の歴史を記述したもので氏獨特の妙筆で機微なる批評を加へてある。二十世紀に入つて西歐各國に於ける普及の有様、第一回の萬國大會よりブーローニュの宣言、言語委員會設置等より筆を起して各大會の模様、U.E.A.の創立と世界大戰前後の變轉に及び、續いて學校教育へのエス語の採用より K.R. の設立、商業上の活用、更に労働者へのエス語と S.A.T. の奮闘、國際聯盟との關係、ラヂオへの應用、科學とエス語、國際労働局及萬國電信同盟とエス語、夏期大學等最近迄細大漏さず記述し盡してある。最後に文學上、言語進化上より論じ最近のエス語界の問題たる方言との關係、英語との優劣問題、等に及んで結尾せられてある。各部分の批評に就ては同氏の見解必ずしも妥當とは云ひ難いが其材料の豊富なると要領の良いのとは全く近來の名著である。裝釘極めて美麗以て其内容に錦上添花を添へるものがある。何人も必携の書であらう。

★**AŬSTRALIO, LANDO KAJ POPOLO**, de S. Delsudo & Lauri Laiho, 15×22 cm., p. 94 kun 31 tutpaĝaj ilustraĵoj & 1 landkarto, prez. Rm. 6.50, eld. same kiel supercitita, 1927.

濠洲を紹介した美しい本で三十一枚の寫真と一枚の地圖によりその全土を遺憾なく紹介してある。著者の一人は同地に永住せる外國人で他は土着の濠洲人であつて最も公平なそして正確な風土記である。其周圍、内部、風俗習慣、生活狀態、政治、宗教、移民、發見及探險、等各方面に亘つて詳細に記述せられ最後に各方面の統計が載せられてある。案内記的にならず極めて上品にそして學問的に出來て居るのが結構である。

★**ZAMENHOF-RADIKARO**, de Eugen Wüster, 18×25 cm., p. 84, prez. Rm. 6, eld. same kiel supercitita, 1927.

“Enciklopedia Vortaro E-ta-Germana” 編纂中の碩學 E. Wüster 氏がザ博士の著書中に現はれた neoficiala な語幹を蒐集分類して其出典を明確にしたもの。非常な努力と根氣を以て完成されたもので此種の方面に興味を有する lingvisto には有用な書である。

★**RADIO POR ESPERANTISTOJ**, (Internacia Radio-Revuo.), 15×24cm., p.172, eld. Etienne Chiron, 40, Rue de Seine, 40, Parizo, Francujo, 1927.

Internacia Radio-Revuo の昨年度分の合本であつて全篇ラヂオに關することをエス語で書いてある。アンテナの張り方、受信器の優劣等の理論的説明から各國ラヂオ界の狀況等内容極めて豊富である。ラヂオファン諸君必携の書である。

★**POLLANDO KAJ GDANSK (DANZIG)**. (Ilustrita gvidlibro tra Pollando kaj Danzig), 12×18 cm., p. 112, eld. de Pollanda E-to-Delegitaro, Krakow, Polujo, 1927.

此夏ダンチヒで催された萬國大會を機として同市及波蘭を紹介する爲に著はされた案内記で數十枚の寫眞が挿入されて詳細な説明が附けられある極めて懇切丁寧なものである。

★**LA HOMA LINGVO**, de W. E. Collinson, 11×17 cm., p. 94, prez. 1 Rm., eld. de R.M., Berlin, Germanujo, 1927.

モッセの世界叢書(本誌第七年 23 頁參照)の第十八、十九編でリヴァプール大學教授の言語學博士の「言語學提要」である。言語の本質よりその發音學的研究、方言と統一、個性と言語續いて言語の分類と内容極めて豊富然も簡潔に素人向きに書かれてある。此叢書に此種の専門的の著述の加へられたのは極めて結構なことである。

★**BONHUMORAJ RAKONTOJ**, de Janusz Korczak, trad. de Anna Weinstein el la pola, 11×17 cm., p. 64, prez. 0.50 Rm., el de Rudolf Mosse.

前掲同叢書第二十編で児童心理を描寫するに妙を得た輕妙の筆を持つたコルチャツクの數篇をエス譯したもので極めて輕い講習會用として適當なものである。

★NATURSCIENCO, MONDKONCEPTO, RELIGIO, de D-ro Johannes Peinke, 16×20 cm., p. 162, prez. 4 sv. fr. afrankite, eld. de Katolika Mondo, Koeln Lindenthal, Germanujo, 1927.

キール大學植物學博士の著者が形而上及形而下學の分界と人生觀との關係を説いた論文のエス譯である。科學と哲學との分界より自然科學の方法論に及び宗教觀で大尾をなして居るところ日本でいへば永井潜氏の面影がある。

★JARLIBRO DE JEMA, 1927, 15×11 cm., p. 56, eld. de Japana Medicina Asocio, 1927.

大正十五年四月第七回日本醫學會のとき創立せられた「日本エスペラント醫學協會」の年報である。會計及事業報告續いて汎太平洋會議への抗議の事情を掲げ會員名簿を載せた立派なもの遠く朝鮮滿洲に及び醫界エス運動の盛況を語るものである。

★INTERNACIA DIALOGARO, originale verkitaj dialogoj de diversaj aŭtoroj, 12×16 cm., p. 60, prez. 1.25 sv. fr., eld. Belga E-to-Instituto, Koopera Societo, 11 Kleine Hondstraat 11 Antverpeno, Belgujo, 1927.

各國の對話をエス譯せるもの英獨佛日露等方面は汎く其エス語も立派である。集會の餘興等には極めて適等な材料であります。

★GERMANUJO, WIESBADEN, gvidlibro de Wiesbaden, 11×23 cm., p. 16, senpaga eld. de la Urba Oficejo por Trafiko en Wiesbaden, 1927.

獨逸ナツソーの古都ウィースバーデンの案内記。美麗な寫眞入の本である。無代進呈であるからごしごし申込をせられない。

★WELTHUMOR IN ESPERANTO, N-ro 6 de Du-lingva libraro; prilaboris D-ro Emil Pfeffer, prez. 0.50 Gmk., 13×16 c. m. p. 87. eld. de Steyermühl-Verlag., Wien I, Wollzeile 20.

これは Tagblatt-Bibliothek の N-ro 541-542 にあたるもので Wien ででゝある岩波文庫式のものでこの中のエスペラントに關したものでエスに關したものはこの叢書の中に 8 種ほどある。これはその中の一つである。これは獨逸語とエス語の對譯になつてゐて(I) ŝerco,

(II) sprito, (III) anekdoto, (IV) historia anekdoto の四部にわかれてゐてすべて笑話や一口噺をあつめたものであるが日本人には判りにくい(歐洲の風習がわからぬので)のもあり又日本人にはちつとも面白くないものもあるが仲々滑稽なものもある。エス文はあまり感心できないのがかなり多い。しかし獨逸語の勉強には役にたつかもしらない。pastro を pastoro としてゐるのはどういふわけか。

Mi bedaŭras ke mi ofte trovas nerekomendindajn stilojn en la frazoj de Esperanta parto.

Kial la aŭtoro uzas "pastoro" anstataŭ "pastro," kiu estas oficiala vorto?

★九州エスペラント聯盟年鑑(昭和二年度 [Jarlibro de Kiusiu Esperantista Ligo, 1927] 13×16 c. m. p. 40. prez. ¥ 0.50, eld. de K. E. L. akirebla ĉe S-ro Kidosaki, Torigai 1652, Fukuoka-ŝi.

九州エスペランチスト聯盟の年鑑で第一部聯盟規約(5頁)第二部九州エス運動小史(22頁)第三部九州同志名簿(13頁)からなり六號活字で組んだもの故内容豊富である。福岡市鳥飼 1652 城戸崎益敏君宛申込みば金50錢にて頒つ由。

★クレープ造花の手引(竹下かなえ著)東京市本郷區弓町倉持本店發行。價60錢)表題がエスペラントで書かれてゐる (Gvidlibro de krepopapera manlaboro) のはうれしい。内容はクレープ紙での造花についてよく。

★"DANCO DE SKELETOJ" (originale verkita en japana lingvo de Ujaku Akita. Tradukita en Esperanto de K. Susuki kaj H. Ŝuzui.) 11×15 c. m., 76 p., prez. (afrankite) 1 ŝilingo (1.25 sv. fr.) Eld. de Japana Esperanto-Instituto, III-14 Ŝin'ogaŭamaĉi, Uŝigome, Tokio.

Tiu ĉi libreto enhavas tri dramojn de S-ro U. Akita: "Fonto de Sudroj", "Danco de Skeletoj", "Nokto ĉe Landlimo"

U. Akita estas unu el la plej progresemaj dramverkistoj, kiujn havas nuntempa Japanujo, kaj li estas fervora Esperantisto. Lia ideo estas subtenata de pioniroj en socialista movado kaj de inteligentuloj. Tiuj ĉi tri dramoj estas la plej rimarkindaj verkoj el liaj laboraĵoj, kiujn la aŭtoro mem elekte rekomendis por traduki.

EL KOREAJ FABELOJ

Kojiro Nakagaki

Konkuro de Mensogado.

Antaŭ longa tempo, en la ĉefurbo de Koreujo, vivis potenca jambano, kiu havis altan rangon kaj gravan pozicion. Lia potenco estis tiel granda, ke ĉio fariĝis laŭ lia volo. Kaj tial multaj homoj venadis al li ĉiutage, por akiri lian favoron kaj rekomendon. Ĉiuj ambiciuloj mensogis kiel eble multe kaj lerte, ĉar la vero ne ĉiam venkas, precipe por gajni monon aŭ pozicion, oni devas lerte mensogi. En tiu tempo, mensogado estis tute ordinara afero. Ĉiu sciis ke la mensogado estas plej bona rimedo de prosperiĝo, se oni ne deziras resti mizerulo. Certe, ankaŭ tiu ĉi jambano estis akirinta sian pozicion kaj potencon per sia facilmoŭa kaj senbrida lango. Li estis la plej lerta el ĉiuj mensoguloj, laŭ lia propra opinio.

Tamen fine tediis kaj ĝenis lin tro multaj vizitantoj, li ekpensis pri rimedo eviti malsaĝajn mensogu'ojn; tio ne estis malfacila por li, li tuj ekridetis kaj frapis sian genuon, li faris afiŝon kaj pendigis ĝin ĉe la pordo de sia domo. "De nun mi helpas nur tiun, kiu saĝe trompos min." Tiel oni legis sur la afiŝo. Tiu sciigo efikis tre bone; vizitantoj iom post om malmultiĝis, ĉar neniu povis venki lin je mensogado. Li ĝuis sufiĉe kvietan tempon kaj estis kontenta. Sed unu tagon, en la mezo de la vintro, venis al li junulo, kiu volis trompi lin. Kiam ili sidigis en la salono, la junulo tuj komencis paroli.

—Lastatempe, mi estis invitita de mia amiko, kiu regalis min tre lukse, ĉar li estas riĉega. Mi povis gustumi diversajn tre maloftajn bongustaĵojn, interalie, mirigis min tiel grandega ĉerizo, kiel sonorilego de Ĉongno. Ĉu vi ne opinias ke la ĉerizo estas vere grandega?

—Malsaĝulo! En la mondo ne ekzistas tia ĉerizo, diris la jambano.

—Ha! Pardonu min, via jambana moŝto. Verdire, ĝi estis kiel sonorilo de Jongto-templo.

—Ne mensogu, kie troviĝus tiel granda ĉerizo kiel sonorilego de templo.

—Nu, eble ĝi estis simila al kaldrono.

—Jam ne diru, mi ne trompiĝas per via malsaĝa mensogo.

—Ha! Do, ĝi havis grandon de tekruĉo.

—Ne ripetu plu!

—Kiel taseto.

—Sufiĉe, via mallerta mensogo tedas min, diris la jambano kolereme.

—Tamen mi diras serioze, eble vi kredos, ke ĝi estis granda almenaŭ kiel jujubo.

—Vian saĝon mi jam eksciis ĝis fundo, nun pensu nur pri vera grandeco de la ĉerizo.

—Ĉu vi estos kontenta, se mi diros ke ĝi estis tiel malgranda kiel la fingropinto.

—Jes, fine vi konfesis ke vi ne povis mensogi antaŭ mi, foriru jam, diris la jambano.

【註】〔Konkuro de mensog'ado うそつき 比べ。〕 jambano 兩斑 (ヤンパン) 朝鮮の上流。havis altan rangon kaj gravan pozicion 高位にして重職に就いて居た。laŭ lia volo 思ひのまゝ。favoro 恩寵。rekomendo 推舉。ambici'ulo 野心家。prosper'iĝo 繁榮、榮達。mizer'ulo 惨な者。facil'mova 輕薄な。senbrida 止めごのない出たらめな。afiŝo 貼紙。trompi あざむく。efiki 利き目がある。lasta'tempe 近頃。regali 御馳走する。lukse 贅澤

に。gust'umi 味ふ。bon'gust'aĵo 旨い物、御馳走。sonor'il'ego 大鐘。Ĉongno 所の名、鐘路。Jongto-templo 永道寺。kaldrono 釜。tromp'iĝas だまされる。te'kruĉo 急須。tas'eto 珈琲茶碗の如きものの小さいもの。koler'eme 腹立たしげに。serioze 眞面目に。jujubo 棗。ek'sciis ĝis fundo すつかり判つた。pensu nur pri... まづ櫻の實の本當の大きさを考へて見るがいゝ。fingro'pinto 指先き。konfesi 白狀する。for'iru jam もうあちらへ行け。fiere

La junulo fiere marŝis straton laŭte kriante ke li trompis la jambanon. Kolektiĝis amaso da homoj scivole ĉirkaŭ lin. Li parolis detale pri la konversacio inter si kaj la jambano, kaj aldonis.—La maljuna jambano eĉ nun kredas ke mi manĝis ĉerizon en la mezo de vintro.

—Ho! vi efektive trompis lin. Ĉiuj laŭdis lian lertecon.

Kiam la jambano aŭdis la famon, li miris kaj konfesis ke li estas ja venkita. La junulo akiris gravan pozicion, dank' al la rekomendo de la jambano.

Tigro kaj Sekpersimono.

En arbaro loĝis tigro, kiu estis tre fiero pri sia potenco. Ĝi estis tiel potenca, ke ĉiuj bestoj en arbaro ektremis kaj kaŝis sin en arbitaĵon, kiam ĝi montris sin sur alta roko kaj ekmugis. Estis al ĝi tre agrable vidi kiamaniere la timigitaj bestoj forkuras kaj kaŝas sin konfuzitaj. “Vere mi estas reĝo de arbaro.” ĝi pensadis kontente.

En iu vintro, la neĝo kovris la tutan regionon, kaj en la arbaro troviĝis nenio manĝebla. La tigro eliris el sia kuŝejo kaj iris al iu proksima vilaĝo. Post la vesperiĝo, la malsata tigro eniris en la vilaĝon kaj ŝtele aliris sub fenestron de unu domo.

“Aan aan aan.” aŭdiĝis plorkrioj de infano, kaj la voĉo estis malforta kaj raŭka.

“Jam longe ĝi kriadas supozeble,” ekpensis la tigro, “kial ĝi ploras, ĉu okazis io terura?”

La tigro ekvolis eniri, sed ĝi atendis, aŭskultis plu. Subite aŭdiĝis alia voĉo, ŝajne de la patrino. “Jen venas sovaĝa kato kun malfermita buŝego, silentu!”

La patrino penadis silentigi, sed vane, la infano ne ĉesis plori. La patrino diras denove: “Jen serpentego, ho terure!” Sed, ŝajnis al la tigro, ke la infano tute ne timas vortojn de la patrino, kaj obstine kriadas.

La tigro ekmiris kaj ekmeditis: “Kia maltima infano ĝi estas, ke ĝi timas nek sovaĝan katon nek serpentegon! Kia infano!”

Malsato instigas la tigron ensalti en la domon, tamen mirigita tigro enpensiĝis profunde, sidis kvazaŭ idiotulo. Tiam subite ekkriis la patrino: “Vidu! Granda tigro staras ekster la fenestro!” La tigro estis surprizita, alfiksis sin al la muro, malfacile spirante pro timo.

La tigro apenaŭ sin regis, levis la kapon kaj pliatente aŭskultis. La aan-aan-kriado ne ĉesiĝis, kvazaŭ la infano tute ne timas tigregon. “Kia infano! Kiel maltima ĝi estas! Ĝis nun mi kredis, ke mi estas plej potenca kaj terura en la ĉirkaŭaĵo. Kaj la patrino nun diras pri mi, jam eksciinte ke mi estas ĉi tie. Malgraŭ tio, la infano ne timas. Mirinde estas ke tia infano ekzistas.” Tiel pensante la tigro hezitis ensalti en la domon.

Denove aŭdiĝis la voĉo de la patrino: “Jen sekpersimono!” Kaj, kia mirindaĵo, la infano tuj silentiĝis. “Eĉ la patrino tute silentas,” la tigro enpensiĝis, “kio estas sekpersimono? Eble, ĝi estas pli forta, pli terura, ol sovaĝa kato aŭ serpentego, eĉ ol mi.”

Piedoj de la tigro ektremis. La tigro vane penis trankviligi sin. “Se tiu sekpersimono venus ĉi tien! Urrr terurege!”

La tigro tute forlasita de memkredo senbrue malproksimiĝis de la domo kaj forkuris en la arbaron.

marŝis straton 得意満面道を闊歩した。kolektiĝis...ĉirkaŭ lin 彼のまばりに集つて來た。sci'vole 好奇心をもつて。parolis detale 一部始終を話した。konversacio 會話。al'doni 付け加へる。konfesis ke li estas ja venkita いかに自分も自分は負けたと云つた。

[Tigro kaj Sek'persimono 虎と干柿] arb'et'aĵo 灌木叢。roko 岩。ek'muĝi 吼える。vidi kia'maniere la timigitaj bestoj... 恐れをなした獸共が逃げ去つたり隠れたりする様子

を見る。konfuz'ita あはてふためく。neĝo kovris la tutan regionon その地方全部雪で被はれた。kuŝ'ejo 臥所、獸等の穴。ŝtele al'iris こつそり忍び寄つた。plor'krio 泣きわめく聲。raŭka しわがれた。ŝajne de la patrino 母の聲らしい。sovaĝa kato 山猫。mal'sato instigas...en'salti 飢が虎をかつて家の中に躍り込ませやうとした。apenaŭ sin regis 辛うじておのれを制した。vane penis trankviligi sin 氣を落ちつけやうと努めたが駄目であつた。

TANKA'OJ¹⁾ EL MANJOOŜUU²⁾

Trad. de Mijake-Ŝihej

Apud la Golfeto Ŭakano-ura

de Jamabe-no-Akahito

Ŭaka-no-ura ni
ŝio miĉikureba
kata o nami
aŝibe o saŝite
tazu naki-ŭataru

En la golfeton
fluas tajdo; perdiĝas
do la sablejo,
kaj kriante transiĝas
la gruar' al kanejo.

Kiam Pasigis nokton ĉe Akino

de Kakinomoto-no-Hitomaro

Hin³⁾gaŝi no
nu ni kagiroy no
tacu miete
kaerimi sureba
cuki katamukinu

Lumet' de l' suno
tagiĝa, oriente
sur kamp' sin movas:
kaj post ni sin la luno
eksubiranta trovas.

Sopirante al la Imperiestro Tenĉi-Tennoo

de Nukata-no-Ookimi

Kimi macu to
aga koioreba
aga jado no
sudare ugokaŝi
aki no kaze fuku

Mi sopirante
atendas vian venon;
ho! rulkurtenon
de mia dom' movante...
— aŭtuna vento blovas.

La Prunfloro

de Jamanoe-no-Okura

Ume no hana
ime ni kataraku
mijabitaru
hana to are mou
sake ni ukabe koso

Tiel diris min
en la sonĝo la prunflor'—
pensas mi ke flor'
eleganta estas mi,
do sur vino metu min.

Alaŭdoj

de Ootomo-no-Jakamoĉi

Uraurani
tereru harubi ni
hibari agari
kokoro kanaŝi mo
hitori omoeba

Suprenflugadas
alaŭdoj tra l' ĉielo
serene hela
printempa; kaj mi sole
sentema meditadas.

1) Odo havanta 31 (= 5 + 7 + 5 + 7 + 7) silabojn. [753]

2) La plej malnova poemaro (aperinta en]

3) Tiu ĉi "n" estas vokalsimila sono mal-sama kun ordinara "n", kaj ĝi sola formas unu silabon.

Verda Letero de Profesoro H. Asada.

[7]

Londono, la 12an de Junio.

Kara samideano,

Ni estas tre lacaj pro la vizito tra la urbo. Mi ne havas sufiĉe da tempo skribi detale. Akompanado de edzino faras al mi multe da okupo. Ŝi ankoraŭ ne povas kompreni Esperanton. Jam nenio helpas al mi, se oni diras ke tio estas mia ŝuldo.

Mi vizitis oficejon de ĉi-tiea Esperanta Grupo. Gazetoj, libroj Esperantaj k. c. estas bonege aranĝitaj. Ĉiu merkrede kaj vendrede oni kunsidas. Mi ankaŭ tiam salutis per paroladaĉo. Hodiaŭ ni volas forveturi al Edinburgo/, ŝanĝinte programon je nia bedaŭro.

En Calais kaj Dover samideanoj bonvolis veni renkonte al ni kaj prizorgis pri ni, ĉar mi anoncis ilin telefone pri la alveno.

H. Asada.

[8]

Edinburgo, la 16an de Junio.

Ni ŝanĝis programon, ĉar mia edzino estas malsaneta eble pro ŝanĝiĝo de vivmaniero. Ŝi ankoraŭ ne povas kompreni Esperanton. Ĉi tie s-ro Del. de UEA mem prizorgis pri ni, akompanante nin tra la urbo. Ni ĝuis skotan pejzaĝon kaj spiriton!

H. Asada.

[9]

A Bord Le pologue,

La 25an de Julio 1927.

Kara samideano kaj amiko Takahara.

Kiel vi fartas? Mi nun estas sur la ŝipo "Le pologue" kiel ano de karavano, kiu forveturis el "Le Havre" al Danzig. Dum kelkaj tagoj mi havis palan vizaĝon, ĉar mi sentis min malsaneta. Hodiaŭ mi sufiĉe sana. Estu trankvila!

Mi nun preparas prelegon por la somera universitato. S-ro Prof. Segaua el Kanazaŭa, kiu nun veturas kun ni, bonvolis korekti kelkajn erarojn de miaj artikoloj, ĉar mi perdis la vortaron survoje, mi nur skribas laŭ mia memoro.

Ŝipoveturado daŭras dum 4 noktoj kaj 5 tagoj. Ni nun pasas la kanalon de Kiel.

Laŭ la letero de s-ro Tomimacu vi terure klopodas ekzerci interparoladon Esperantan. Eble vi estos multe pli bonstila kaj elokventa ol mi, kiam mi revenos al Nagasaki, ĉar domaĝe mia edzino ankoraŭ ne volas sindoni al la lernado de Esperanto. Mi estas ĉiam devigata paroli japane. Tio efektive malhelpas mian progreson.

Mi opinias ke ni de nun devas klopodi malfermi universalan kongreson de Esperanto iam en Japanujo. Inter la kunveturantoj troviĝas multe da personoj, kiuj jam partoprenis multe da fojoj la kongreson. Ili estas tute fieraj priparoli pri tio. La kongreso ŝajnas esti nur por Eŭropo (escepte unu fojon en Ameriko). El la vidpunkto de internacieco ni proponas ke oni malfermu ĝin de nun en Eŭropo, Azio, Ameriko, Afriko aŭ en Aŭstralio respektive. Klopodu vi ankaŭ!

La 27an de Julio.

Ni jam alvenis al Gjerne, kie ni devas elŝipiĝi kaj el kie ni volas alveturi al Danzig per vagonaro en pli ol unu horo. Ĉiunoktaj kunsidoj sur la ŝipo estis tre lacigaj por ni. Timante ke mi difektos mian sanon mi ne ĉiufoje ilin partoprenis. Antaŭ unu semajno mi sentis doloron en la dorso kaj lacegon, sed nun nenia ŝanĝo restas. Mi nur timas ĉu mi povos paroladi laŭtvoĉe antaŭ publiko aŭ ne. Mi nur faros kiel mia sano permesos al mi. Domaĝe ke mi difektis mian fotografilon sur la ŝipo.

Mi ĉesos skribi ĉi tiun leteron. Jen atendas ŝipeto por nin elkonduki al la kajo.

Akceptu nian sinceran saluton!

H. Asada.

[10]

Danzig, la 31an de Julio, 1927.

Kara amiko.

Kiel solena kaj grandioza estis la malfermo de la kongreso! Feliĉe mi komprenas ĉiun vorton de s-ro Privat kaj aliaj. Kiel elokventa estis kaj estas s-ro Privat! Li diris: en Ĝenevo japanoj balbutas france aŭ angle ĉe la konferenco. Se oni iam devus malfermi konferencon en Tokio japanlingve, eŭropaj delegitoj devus balbuti. La distanco de Ĝenevo al Tokio estas tute sama al tiu de Tokio al Ĝenevo, ktp. Mi unue aplaudis kaj aliaj sekvis min.

Sinjoro! Feliĉe mia saneco estas nun tre bona. Hieraŭ mi paroladis ĉe TEKA kaj vespere ĉe la invitkunsido kaj ĉe la radiostacio mi salutis en la nomo de la Esperantistaro de Japanujo.

Via H. Asada.

[11]

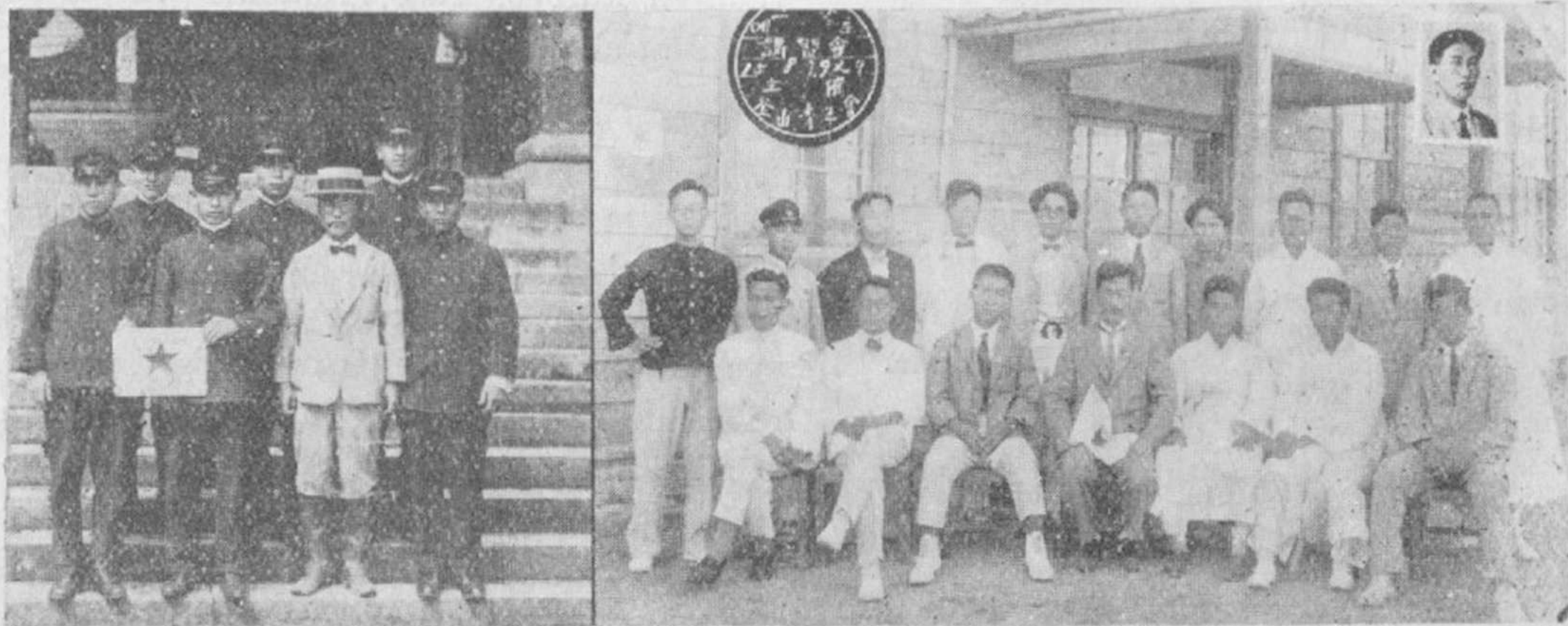
Danzig, la 4an de Aŭg., 1927.

Kara samideano,

Hodiaŭ la kongreso finiĝis tie ĉi kaj daŭros plu en Varsovio, kien ni ne plu iros. Ni volas hodiaŭ vespere alveturi al Königsberg kaj poste al Danujo. Feliĉe la vetero

estis dum la kongreso ĉiam tre bela. Danziganoj laciĝis sed neniu malordo troviĝis. Sur la programo oni ne trovas la lokon precize, kvankam la horo estas anoncata. En TEKA kaj en Somera Universitato miaj prelegoj donis al la aŭskultintoj grandan sensation, alivorte mi havis grandan sukceson. Ĉe la nacikostumbalo mia edzino, kiu vestiĝis japanmaniere grandioze, gajnis la unuan premion, kiel ni jam supozis. Ĉio estis granda sukceso por japanoj. La diskutado de s-ro Ossaka kaj la saluto de Prof. Hasegawa(Keiĵo) estis ankaŭ tre bonaj. Entute 8 japanoj ĉeestis: s-roj Ossaka, Hasegawa, Segawa, Kodera, Oiŝi, Doki kaj ni ambaŭ. Neniŭ ĉino! Ĉiuvespere oni invitis nin kaj ĉiumatene ni ellitiĝis frue. Ni estas tute lacaj. Precipe hodiaŭ mi sentas min lacega. Venu la venontan jaron al Antverpeno! Nepre! Ĝojega kongreso! Se eble, varbu partoprenontojn kaj organizu karavanon! Komencu preparon de nun! Miaflanke mi deziras, se eble, denove alveturi, sed ne la venontan jaron, eble post 4-5 jaroj, ĉu ne?

Mil salutojn al vi,
Via H. Asada.
Miĉiko.



【寫眞明説】〔左圖〕長崎の三菱造船所で見學中の東京、神戸兩高等商船學校の學生が富松氏(前列背廣の人)の指導の下にエス講習をうけた紀念の撮影。〔右圖〕今夏釜山に於て開催のエスベラント講習會員。向つて右より。前列、吳準植、羅羽淳、李圭弼、白南奎(講師)、姜大洪、李沃周*、金沃根。後列。禹甲苗、鄭永謨、韓斗苗、任守吉、徐甲祚*、任龍吉*、金奉玉、安仁默、姜大爽、任舜赫の諸氏。(右上枠内)金時燁氏*。

(*印は釜山エス研究會委員)

々の言語の非常に熱心な支持者となられました。——上に申述べたことから我々は次の法則を引出すことができます：即ち若し我々が或る變更を提案し又は提案せんとするならばまづ我々はその變更が如何なる利益を言語其れ自体に齎らすものであるか又はその變更の利益が其の害を蔽ひ得るだろうかを考へてみればならないといふ事です；併し我々は決して基礎のない趣味や單なる或る特別の國民の虚榮心に従ふてはならぬのである、何となればかゝる場合には我々是我々の事業に大害をもたらすこととなつてしかも何人に對しても何等の利益をも齎さないからであります。若し個人的或は國民的議論好きのために我々の事業が破壊されることを我々がおそれるならばその内容に於て絶對的に重大ではなくしかも空虚な何等理由のない國民的趣味はかゝる國際的の事業に於て個人的趣味と同様あらゆる機會に於て絶對に沈黙すべき性質のものであります。これらの趣味は言語の創造の時に於てさへ既に沈黙すべきであり若しそれに服従する事が我々の言語に破壊を要求することになる様なものなら疑もなく尙更一層沈黙せしむべき性質のものである。

(La Esperantisto, 1891, p. 49-50.)

文 體

エスペラントに於ける慣用語句について

私は慣用語句 (idiotismoj) が段々に消滅し全く論理的な國際的な表現にその地位を譲る様になる事を望みます。併し私一個の意見としましてはこの置換 (anstataŭigado) はそれが全く便利にできる場合のみになさればならぬ事であつてその何等かの慣用語に對して一層よい純粹に論理的な表現のし方が見つからない場合には別にそれがために心をいためるに當らないことです；慣用語句は一般に承認されてゐるならそれは全く都合よく『エスペラント語風 (esperantismo)』のものとして存在してゐて差支へがない。

(Lingvo Internacia, 1905 p. 545)

エスペラントの文體に就いて

私の翻譯した “La Revizoro” の中には時たま直ぐには解し難い文句があります；特に Osip の言葉の中に屢出てくるでせう。併しながら之等の文句はロシヤ語の文體の逐語譯であるだろうとの貴君の御想像はあたりません。Osip は全く論理的な文獻的な文體で話さないで無教育なロシヤの下男の使ふ文體で話すのであつて私は彼の談話からその特質の全部を失はないやうにするため少くとも少くはこの文體を保存せねばならなかつたのです。彼は屢單に語を轉訛 (kripligi) させることがあるのです。私はこれはさげやうを努めました、といふのは若し讀者に對してのみならば各頁の下部に説明をつけなければできせうが劇場での聴衆に對してはそれができないからであります。單に一ヶ處私は “kolegia registratoro” (ロシヤにおける低級の官等) の代りに “registreto” を用ひました、そしてそれに長たらしい説明を加へる代りに其の語が正規のものでない事を示す爲に單に引用符 (signeto de citado) を附しておいたのです。又他の箇處では正しくないがしかし轉訛されてはゐない云ひ方を使つたのです。(例へば私は故意に “kartoj” (ludaj) の代りに “kartetoj” を “publikeco” の代りに “publikajo” 等を用ひた)。私は讀者や觀衆が之がよいエスペラントの文體ではないが無教育者の話體であること或はあれこれの示された特殊の人物の慣用する特異の文體であることを客易に了解してくれることを望んでゐるのです。

或る人々は私は私の著作中にスラヴ語式の文體を使用すると考へてをられる様です。併し斯かる考へは全くまちがつてゐます。エスペラントにおいてはスラヴ人が屢々獨逸人やラテン人よりも立派な文體を書くことは事實であります；併しこのことはエスペラントの文體がスラヴ的の文體であることによるのではなく唯スラヴ語が一層簡單な語序 (vortordo) を有し従つて又エスペラントの語序と相近似してゐることから來るのです。エスペラントの眞の文體はスラヴ的でもドイツ的でもなくローマンス語的でもなくそれは唯簡單な論理的な文體であるのです或は少くともそうあらねばならないのです。

vin, ke mi revenos hejmen post du monatoj, ne pli frue ol en la
fino de Aŭgusto.”
(La Revuo, 1906, Decembro.)

348

私の最近の作品における文體

貴君は私の最近の翻譯作品の中には時たま難解の文句があるとの御手紙を下さつた。貴君は或るエスペランチストでない人に對してエスペラントの大變容易しいことを納得させようとして彼の目前で “La Rabistoj” の或箇處を翻譯せられたが貴君自ら十分よく解しかれる文句に逢着せられて且又貴君が呼よせた數人のエスペランチストも亦或は了解できなかつたり或は異つた譯語をつけられたので大變難澁せられたこのことですが、御難澁のほどさこそさ御察し致します、若しそれが私の拙い翻譯のため惹つたことでありますれば御容赦に預りたいと存じます；ですが……甚だ失禮ながらその一端は貴君の方にも落度があるのだといふことを申述べさして戴きたく存じます。無準備でエスペランチストでない人の前で實驗をやられるに際しましては古典や眞面目な作品をさるべきではなくむしろ或る簡単な作品を撰ぶべきであつたらうと考へます。ずつと以前に死んだ古典作家の作品中のあれこれの文句が明瞭に了解できぬとすればそれは人愼翻譯語の罪ではなくて原作者自身の罪であるのです。御存じの如く大作家といふものは自己の作品の形式 (formo) の十分なる通俗性を顧みるよりも一層深くその内容 (enhavo) に留意してゐるものですからその作家の同國人でさへ其作家の著作中の文句が常に明確に解釋されないことになり屢々註解 (komentario) が必要となるのです。其れ故に私の古典の翻譯中に一目みただけでは十分明かでない箇處が時たま見あたつたとしてもあやしむべきことではないと考へます。若し私が全く通俗的な文體 (tute populara stilo) の翻譯をしようといふのならば a) 單に通俗的作品を擇ぶべきであり且つ b) 完全に了解できぬものや容易く翻譯できぬ文句を全く放棄するか或は隨意に自由に翻譯するかせねばならないでせう。こんなやり方ならば今私がやつてゐる翻譯のやり方の様

リングヴァイ・レスポンドイの體

併しながら總て物事には節度がなければなりません。エスペラントに於ても亦(少いが)いろんな慣用語 (idiotismoj) が存在します、而して或るエスペランチスト達は之に大いに反對してられるのは全く當をえたことではありません何となれば絶対に論理的な全然 idiotismojのない言語は生命のない大變重苦しいものでありませうから；併しエスペラントの慣用語の中幾何かはスラヴ語系から採用した(あるものは他の言語から採つたものであるが)といつてもそれは決してスラヴ語風の語 (slavismoj) といふべきではなくしてそれは既に言語の一部となつた以上エスペラント的慣用語 (esperantismoj) であります。

エスペラントの文體は盲目的に他の言語の文體を模倣するものではなく此言語の長い間の實際的使用や此の言語が發表される以前から此の言語で物を考へてゐる間に形成された全く特殊の獨立の特質をもつたものです。若しスラヴ人の何人かが猶此言語における十分な熟練もなくして自國語から逐語譯的にエスペラントに翻譯するならばその文體は未熟なラテン人ドイツ人のエスペラント文體と等しく一樣に悪いつまらないものとなるでありませう。一例として文法と語彙とを學び終へたが猶未だ其の文體を識らず唯逐語的に自國語から翻譯するロシア人から屢々私が受取る手紙の一を次に一部分引用してお目にかけよう。此の一片(文法的にも語彙的にも誤の一つもない!)の文體とエスペラントの文體とを比較してみて下さい、然らばエスペラントの文體がスラヴ的だと云ふ二三の人々の意見が如何に誤つてゐるかが直ぐ認められるでありませう。

“Favora Regnestro! Honoro havas alkuŝigi, kio laŭ kaŭzo de antaŭskribita al mi kun kuracisto kuraco mi en efektiva tempo ne en stato elpleni de donita kun mi al vi promeso; apud kio postaperigas, ke mi turnos sin al domo tra du monatoj, ne pli frue de fino de Aŭgusto.”

この同じものがエスペラント文體では次の如くである。

“Estimata sinjoro! Mi havas la honoron raporti al vi, ke kaŭze de kuracado rekomendita al mi de la kuracisto, mi en la unua tempo ne povis plenumi la promeson, kiun mi donis al vi; mi ankaŭ sciigos

財團 日本エスペラント學會發行圖書其他
法人

最新刊

秋田雨雀戯曲三編

定送
價料
40 2
錢錢

須々木要、守隨一兩氏エス譯 【星野浩吉氏装幀】

内容は秋田氏の三傑作スダラの泉 (Fonto de Sudroj) 骸骨の舞跳 (Danco de Skeletoj) 國境の夜 (Nokto ĉe Landolimo) をエス譯せしもの。

エ初 ス等 ペラ講 ラ座 ン	エ ス ペ ラ ン ト 讀 本	エ ス ペ ラ ン ト 捷 徑	新 撰 エ ス 和 辭 典	エし ス ペ ラ ン ト 讀 み や さ 物	エ發 ス ペ ラ ン ト 究	緑 星 旗 (紙製)	緑 星 章 甲種(安止) 乙種(脊廣用) 丙種(特製) カウスボタン	日エ 本ハ 風景ガ 風俗ギ (一組 四枚)
(價送 二料 十二 錢錢)	(價送 三料 十二 錢錢)	(價送 料一 六圓 錢)	(價送 七料 十五 錢錢)	(特送 價料 十二 錢錢)	(價送 五料 十二 錢錢)	(十共 枚十 送五 料錢)	(價送 五料 十六 錢錢) (價送 一料 圓廿 六錢 錢)	(價送 料廿 二錢 錢)

取次圖書 Rememeroj de Esperantisto 價40錢 送料2錢

ブルガリヤ國エス界の重鎮アダナソフ氏が自己の esp-ista vivo について隨筆的に書いたもの興味ふかき物。27部程あり。

東京市牛込區新小川町3の14
〔振替東京11325番〕

財團 日本エスペラント學會
法人

第十五回日本エスペラント大會紀念品

大會バザールで賣つた紀念品が多少残つてゐますからお賣り致します。

★繪葉書 四枚一組(數色刷) 價15錢 送料2錢

★便箋 (leterpaperoj) 一冊(40枚) 價30錢 送料6錢

但罫入と罫無と一冊宛買つて下されば 50 錢に割引します。

★原稿用紙 一冊 價20錢
(70枚) 送料4錢

★紀念手拭 一枚 價15錢
送料2錢

以上すべて贈答品として優美であり適當です。【御注文は下記へ願ひます。(なるべく振替で)】

福岡市大名町3の105
振替口座福岡20048番

日本エスペラント學會福岡支部

★書籍と一緒に御注文下さる方の便宜をはかり東京の學會本部にも多少そなへておきますが澤山の注文はすべて福岡支部へ願ひます。

故東宮豐達君遺兒教育後援會

既に御承知のことと思ひますが、エス譯「宣言」を Internacia Mond-literaturo の一冊として、獨逸から出版しましたのを初めとして種々のエス譯、エス著のある熱心な又秀れた同志醫學士東宮豐達君は去る六月下旬死去されました。過去の業績によつて示された其の才幹と熱誠とに徴して、將來一層大きな期待を抱かれてゐたこの同志を斯の如く早く失ひました事は我がエスペラント界の爲實に痛惜に堪えぬ次第であります。

扱て同君の死後遺族としては夫人貴子氏と共に本年僅か七歳になられる一女エルザ嬢がありますが、このエルザ嬢の教育は同君が殊に心にかけて居られた事で、臨終にも親近者に其の關心を洩らされたと聞きます。

茲に於きまして私共同志は相談の上左記要領によりこのエルザ嬢のために教育後援會を起し、大方の同志諸氏にお願いして教育費の一部なりとも集めて之を遺族の方に贈呈する事を思ひ立ちました。これによつて一生をエスペラント事業に捧げたこの同志東宮君の生前の功績に對し、同志として些か感謝の意を表すると同時に、同君の靈を慰める一端とも致したいのであります。

何うか私共の微意を御諒察の上御賛同御助力下さいます様偏にお願い致す次第であります。尙御知り合の方々へもよろしくおつたへ下さい。

東京市外目白文化村五七 西成甫方

昭和二年九月

東宮豐達君遺兒教育後援會

發起人 (イロハ順)

伊藤徳之助	石黒修	西成甫	千布利雄
緒方知三郎	岡本好次	何盛三	梶弘和
高橋邦太郎	植田高三	倉地治夫	八木日出雄
藤澤親雄	古澤末治郎	淺井惠倫	杉若金一郎

寄附規定

- (一) 寄附金額は一口二圓又は其れ以上のこゝ。一人の寄附は二圓以上でも一口とす。
- (二) 御送金は前記の會事務所へお宛て下さるこゝ。或はエスクラビーズ・グループ(振替番號東京七五五二五)へ御拂込下さるこゝ。但し其際は『東宮豐達君遺兒教育後援會へ寄附』の旨を振替用紙裏面の通信欄へ明記下さる事。
- (三) 寄附者には記念として近く日本エスペラント學會から出版される筈の東宮君エス譯有島武郎氏著『惜しみなく愛は奪ふ』の特製本(四六版百二十頁)をつくつて贈呈するこゝ。
- (四) 一口三圓以上の寄附者に對しては右の外東宮君エス譯武者小路實篤氏脚本小集を出版の上贈呈するか又は他の記念品を贈呈するこゝ。
- (五) 締切——昭和二年十二月末日のこゝ。

寄附金處分

全額中から寄附者へ贈呈の遺著代及雜費を差引き殘額をエルザ嬢教育資金として東宮貴子氏に贈る。

會計及一般事務は發起人中 西、古澤の兩人が擔當します。

發賣以來好評如湧!!

エスペ란トの初等講習の際使用するものとしては従来は文法を主とした高程度のものしかなく、たが今度でたこの本は尋常五六年生から中學の一年生に教へるにも適當なやさしい講習用書です。英語等を知らない人にエスペ란トを教へるのにもつてこいの良書です。

井上萬壽藏著〔中垣虎兒郎氏挿繪〕

エスペ란ト讀本

四六版本文五十餘頁 印刷鮮麗 挿繪約五十個

定價 30 錢 送料 2 錢 十部以上二割引

★ 諸方面よりいたゞいた讃辭の一部 ★

- ◇高橋邦太郎先生より——内容誠に宜敷これさへあれば中學一年生位にも教授し得べく英語の存廢が問題となり居る今日文部當局の理解により本書が全國中學校の教科書となる時機の一日も早く來る様に切に切に祈る處に候。……
- ◇大森志郎氏より——長年望んでをりました第一讀本がこゝに完成されその材料の撰擇配置のみならず活字の大きさ、表紙、挿畫等に大きな努力の拂はれて居りますのを拜見致しましてまことに喜びにたへません。……
- ◇三高エス會より……「エスペ란ト讀本」は實際 epokfaranta な企てだと思ひます。外國語の素養のない人の講習にはもつてこいの用書だと思つて嬉んでりをます。……

發行所

東京市牛込區新小川町3の14
〔振替口座東京11325番〕

財團法人 日本エスペ란ト學會

KORESPONDA FAKO.

★ Japanujo—S-ro Kisaku Otsubo, Kitahama Higaŝitonamigun, Tojama-ken, Japanujo; kĉl. geinstruistoj per P. L.

★ Japanujo—S-ro Kooiĉi Gotoo, ĉe S-ro Date, Cuĉijamaĉi Nakadaĉjuuri-Sagaru Kioto; kĉl. I.P.L. nepre resp.

★ Svedujo—S-ro Gustav Johansson, Box 189, Lycksele (Västerbotten); 日本人と交通希望

★ Sud-Ameriko—S-ro Alfonso Revoredo Iglesias San José 327, Lima, Peru; 日本人と交通希望

★ Germanujo—S-ro Albert Walther, Plaum Vogtland, Gellertstr. Zv; 日本人と交通希望

★ Japanujo—S-ro Takeo Katoo, ĉe S-ro Suzuki, 7-III Nagabei-ĉoo, Higaŝi-ku, Nagoja; kĉl. L. IP. G. Esp-aĵo.

★ Japanujo—S-ro Taketoŝi Ohgami, 295. Niŝijinmaĉi 2-ĉome, Fukuoka; kĉl. IP. L. nepre resp.

★ Japanujo—S-ro Eiichi Takahaŝi, II-34, Macumoto-ĉo, Naka-ku, Nagoja. dez. kor. kun ĉ. l. komencantoj.

誌雜刊月

◎國字問題解決の先驅◎

ローマ字世界

價 定

錢 十二部 一
圓貳金前年一

◎日本の國字となるべき名譽と運命をもつた日本式綴方によるローマ字の雜誌！
◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ字の雜誌を御覽なさい！
◎ローマ字の日本式綴方の論議、要點等に就ては郵券二錢を御送り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

財團法人

日本のローマ字社

東京市本郷區駒込曙町十一番地

振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

秋田雨雀・小坂狷二共著

模範エスペラント獨習

版八十第訂改

西洋の教科書の燒きなほしではない。語系を異にする日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたものである。外國語の素養なき初學者も趣味のうちに習得が出来、既にエスペラントに熟達した人も他書に見出し得ぬ知識を求め得られる。〔布裝三八〇頁・定價二圓・書留送料十九錢〕

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスペラントのみひとり今日の隆盛あるは何故ぞ。それは此の語が優秀であるのさ幾多熱心の士が崇高なるエスペラント主義、即ち人類主義に感激し、身をすて、普及に努力し、努力しつゝあるからである。人類主義の教科書たる本書二〇〇頁を讀むはエスペラント學習者の義務である。〔定價金一圓・書留送料十三錢〕

京東座口替振
番九八八二四

閣

文

叢

區込牛市京東
目丁二町樂神

★
エ ス ペ ラ ン ト
洋 書 目 録

★ Sankta Biblio ¥ 3.60 .18

新舊約聖書完譯 (一千頁)

定價 送料

English Esperanto Dictionary (350 頁)	(フラー、ロング兩著).....	4.50	16
Esperanto Handwörterbuch	(Bennemann).....	1.75	6
Vortaro de Esperanto	(Kabe).....	1.45	16
Zamenhof-radikaro	(ユーゲン、ウステル氏ヒルト社新刊).....	3.00	18
Complete grammer of Esperanto (320 頁).....	(唯一の獨習書).....	1.90	8
Esperanto (露語とエス語の書は之あるのみ)		1.00	4
Esperanto (獨逸 テーゲン氏著).....		1.20	4
Esperanto grammer and Commentary (370 頁).....	(Cox).....	1.90	8
Lingvaj respondoj	(ザメンホフ氏).....	0.75	4
Tra la jaro (四季を通じ繪入にて中等以上の講習に好適)		1.65	6
Mistero de doloro	(A. Gual).....	0.50	6
George Dandin		0.45	4
Fabeloj de Anderson	(第一卷、第二卷、各).....	0.85	6
Ĝemo de unu soleca animo (上海にてエロシエンコ氏著).....		0.90	4
Manon Lescaut (188 頁).....	(Dro-Vallienne).....	1.10	4
Nuntempaj rakontoj	(Stamatov ヒルト社).....	0.80	6
Petro Schlemihl	(Chamisso ヒルト社).....	0.80	6
Himnaro Esperanta (211 歌集)		0.90	4
Verdkata testamento (121 頁)	(R. chwartz).....	1.20	4
Aŭstralio (獨逸ヒルト出版社、新刊寫真入視察談).....		3.25	16
Historio de la lingvo Esperanto 第二卷 (新刊).....		3.00	16
Maŝinfaka Esperanto-vortaro	(E. Wüster).....	0.95	4
Pri la devoj de l' homoj	(S. Pellico).....	0.60	4
Esperanto-Marsch (樂譜).....		1.50	8
Tri lirikoj (樂譜)		0.95	6
★Vivo de Zamenhof	(英國版寫真入).....	1.80	16

代 表 戲 曲

Aspazio	¥ 0.85	8	Marta	¥ 1.50	8
Hamleto	0.75	4	Portreto	0.95	4
Halka	0.45	4	Rabistoj	0.80	6
Kaatie	0.85	8	Revizoro	0.80	6
Makbeto	0.85	8	Vendetta	0.95	6
Hinago	0.40	2	Rakontoj	0.40	2

獨 逸 ヒルト・アンド・ソン社 新刊

Firmao de la kato kiu pilkludas	0.80	6
Barbaraj prozaĵoj	0.80	6
Ano de l' ringludo	0.80	6
Servokapabla! Marcus tybout	0.80	6

洋 書 部

(御注文は爲替か
振替で)

旭 光 社

改正値段目録
贈 呈
切手同封の事

振替番號
東京五二九〇二番

東京市芝區濱松町三丁目一番地
電 話 芝 (43) 二〇一九番

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財団法人 日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京 11325 番】

◆すべての運動は大眾の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時だ。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大眾の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。

◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。(會員は法規上維持員とよぶ)

- 目 的** エスペラントの普及・研究・實用
- 事 業** (a) エスペラントに関する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業
- 會 費** (a) 普通會員 年額2圓40錢 (b) 贊助會員 年額5圓
(c) 特別會員 年額10圓以上 (d) 終身會員 一時金100圓
- 入會手續** 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。
振替送金最も安全)
- 會 員 の 典** 1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「葉」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

役 員 名 簿 (五十音順)

理事長	理 學 博 士	中村精男	理 事	帝大教授醫學博士	西 成 甫
理 事		上野孝男	同 同	慶大教授醫學博士	美野田琢磨
同 同	元鐵道省運輸局長	種田虎雄	同 同	東京朝日新聞顧問	望月周三郎
同 同	東京女子大學教授	河崎なつ	同 同		柳田國男
同 同	中央大學教授	川原次吉郎	同 同		大井 學
同 同		何 盛三	同 同	監 事	三石五六郎
同 同	帝大教授文學博士	黑板勝美	同 同	高層氣象臺長	大石和三郎
同 同	政治教育會會長	小林鐵太郎	同 同	神奈川縣立農業學校長	清水勝雄
同 同	政修大學教授		同 同		木崎 宏
同 同	帝大文學博士	高楠順次郎	同 同	顧問	穂積重遠
			同 同	帝大學博士	三島章道
				子	

本誌購読料 (郵税共)		本會振替號	廣 告 料					編輯兼 發行人	印刷所	印刷人	發行所
一部	全年分		1回	3回	6回	12回	◆金銭に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁は二割引 ◆特別會員の廣告は二割引				
24	140	基本金専用東京三〇八番 會計用(長野三二八番 東京一二三三五番)	全頁 25	72	140	250		大井 學	株式會社一匡印刷所	高見澤保芳	東京市牛込區新小川町三ノ十四
半年分	70	學會々員には無代頒布す	半頁 13	37	74	130					
一年分	260		四半頁 7	19	38	70					